
苺乎（きょか）

ぼぼ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

菅乎きよか

【Nコード】

N5844A

【作者名】

ぼぼ

【あらすじ】

三国志や古代中国史を参考にした中国風架空歴史ロマンです。＜昇王朝しょうてい六七九年、長らく栄えた昇王朝の時代が終焉を迎える。昇王朝の生き残りである菅乎きよかは、莫ていの豪商孝傑こうけつの元で見事な男へと成長を遂げる。菅乎は混迷な戦国時代を生き抜く様々な人々と触れ合いながら、ついに万民の平和の為に立ち上がることを決意し旅立つ。人らしく生きることの難しさ。精一杯生きることの大切さ。晴れ晴れしく生きるとはどういうことか。菅乎の生涯を通じて、現代人が忘れかけているものを描く超長編＞

大京の乱（一）（前書き）

三国志や古代中国史が好きな方にお勧めの架空歴史小説です。英傑が沢山登場します。

大京の乱（一）

東からの突風が一万の兵を薙ぎ倒した。昇王朝しょうわう六七九年、歴史上最も残忍な事件に数えらる大京だいきやうの乱の3時間前の事である。

兵を率いるのは大京より東に一五 キロ程にある茗めいという地方の諸ら侯雷樂いらくである。

男として最も脂の乗った五十代に差し掛かった雷樂は、豪氣の人であつた。

「皆の者、今の強風を見たであらう。春には決まって西風が吹くが、強風は東から吹いた。我等が東方からの正義の一団であるならば、天は正に我等を後押ししてくれようぞ」

暗闇の中、大雨と強風に負けそうな兵一人一人の耳に、雷樂の声は実によく響いた。兵達は一斉に元氣を取り戻す。

「これで良いか」

軍師の託岱たくたいに問うた雷樂の声は興奮していた。

大京の乱に参加した兵は一万五千。

首謀者である雷樂の兵の他に、茗の南の隣国で菟とと呼ばれる地方の諸侯雷何らいかが四千を率いて大京の南の道を北上している。さらに大京には都内の警備を朝廷から任されている大夫の雷明らいめいが、千の兵で各城門を押さえる手筈になっていた。雷樂、雷何、雷明は遡れば同じ先祖にあたり同族である。

雷氏のように名門で、王朝と良好関係にある諸侯が反乱を起こすのには、やはりそれなりの理由がある。

今の昇王朝の天子の名を昇虎しょうこと言い虎王と呼ばれている。虎王は六百年以上続いた王朝の繁栄を貧り続けた愚王と言えよう。歴代の王達が自国、則ち夏元の内政に努めたのに対し、虎王の興味は外国にしかなかった。

夏元は北を魁かいと呼ばれる騎馬民族、東を夙清しよくせいと呼ばれる高度な文化国、西と南を海に囲まれた広大な土地に、約三百万人が住む大国で

ある。四十歳で即位した虎王は、直ぐにそのギラついた目を北に向けた。

遠征は毎年行われ、昇王朝の巨大な財も度重なる魁への出兵で底をつき、そのつけは各諸侯へ、そして当然国民への負担増に繋がった。遠征が失敗する度に、諸侯らと国民の昇王朝への不信任は、怒りへと変化していったのだ。

こうした中での雷樂の挙兵で。正に時代の流れだと言えよう。雷樂の謀叛を知った近隣諸侯は、王朝への忠義立てはせず傍観者であることに終始した。勿論雷樂が各諸侯への気配りを忘れなかった事は言うまでもない。

「君よ、心配されますな。明日には、君が発した号令は天下を駆け巡りましょう」

今日三十歳になった軍師託岱の表情は、若さと自信に溢れていた。

夜明けが近付いている。急に起こされた圭姫^{けいひ}は、侍女の声がこれまでにない切迫したものであることに気がついた。直ぐに身なりを正し、侍女に動かされるままに面会を求める男に会った。

「孝傑^{こうけつ}殿ではありませんか。こんな時間にどうされました」

先程まで熟睡していたとは思えない、はつきりした口調だった。

孝傑と呼ばれた初老の男は、明らかな緊急事態にもかかわらず、日頃と変わらない落ち着いた物腰で、

「圭姫様、早朝の面会謝する時間がございません。都は既に茗主力の兵に取り囲まれております」

と、静かに告げた。圭姫は大きな瞳をゆっくりと閉じた。

ついにこの日が…。

圭姫は虎王の第五婦人で娼の一人だが、もとは虎王の兄、則ち前王^きの第一婦人であった。

虎王は兄を弑した後、兄嫁を犯した。それに飽きると今度は圭姫を野に捨てようとした。たまりかねた重臣らは虎王を説き、圭姫を娼

として相応に扱うことを認めさせた。

この重臣らの行動は、何も圭姫への同情からくるものではない。彼女が魁から夏元に嫁いだ経緯があったからであった。

前王昔の時代、北国の魁は三万の大軍勢で夏元に進行してきた。原因はその年の魁が大寒波に襲われたことにある。

雪に覆われた大地を見た魁の人々は、争うように南へと直進し始めた。魁は古来よりの遊牧民族である。牧畜でしか生活出来ないこの国は、食糧の備蓄に疎く、大寒波の度に夏元の北方に侵入してきた。昔王は先ず使者を立て、食糧の提供を申し出た。争いを好まない昔王らしい決断である。しかし魁には他民族との約束はあてにならないという風習があり、夏元からきた使者の首をはねたのである。昔王が魁から送られてきた無惨な使者の首を見て、大きく失望したのは言うまでもない。

昔王は自から二万の兵を率いて夏元北方に向かった。かつて夏元と魁は何度も戦を交えているが、魁にはしばらく大きな飢饉がなく、両国が顔を会わすのは実に二百年振りである。

両軍は乾かんという夏元の北方領内で激突した。騎馬中心の魁は、兵の多さと機動力に勝るが直進することしか知らず、引いては囲んで撃破してくる夏元の巧みな戦術の前に、歴史的な大敗を喫した。

魁軍の後方には非戦闘員である女や子供、老人が大列を成している。魁の退却は思うようにいかない。猛追してくる夏元軍が撒き散らす砂塵に、魁の人々は生きた心地がなかった。

恐怖で顔を強張らせた魁の首長らは、自分達が夏元の使者の首を切ったことなど忘れて、夏元に和平の使者を出すことを決定した。この和平の使者に選任されたのが、圭姫の父である呂乎ろかであった。

呂乎は若いが有能だ。魁の首長らの間でよく聞く言葉である。六十年代後半がほとんどの魁の首長の中で、四十三歳の呂乎は最も若い。二番目に若い首長とも十違うことから、いかに異例の昇進かが分かる。

魁には大小十六の部族があり、大河夏推かすいの下流北部地方が呂乎の治

める呂である。魁と夏元との国境になるこの地域は非常に重要で、夏元軍は魁へ攻め入る時には必ず呂を攻略しなければならないし、魁にとって呂は、夏元への主な侵入路であった。歴史を見れば、魁と夏元の軍用地は常にここが中心となっている。

呂乎は若くして呂の首長になったが、生臭い権力争いをした訳ではなく、むしろ呂民の圧倒的な支持に推されての選任であった。

呂乎と会った苜王は、彼の誠実な訴えと心底からの謝罪に心を動かされ、直ぐに兵を引き揚げさせた。呂乎が苜王に好意を持ったことは言うまでもないが、それ以上に苜王が呂乎を気に入ったのである。歴史上類い稀な二人の英傑を引き合わせたこの出来事を、乾の会合という。この後二人の関係と共に、夏元と魁は急速に接近することになる。

呂乎は和平の条件として、自分の娘を苜王に贈った。

ほとんど交流のない国に人質として差し出された十六歳の娘を不敏に思った苜王は、魁と友好関係を築きたいこともあり、この娘を第二婦人にしたのである。この娘が、苜王の寵愛を一身に受け、後に正妻となる圭姫である。夏元と魁が和解した十年後に、呂乎が魁の首席となり、圭姫の外交上の価値がさらに上がることになる。

静かに廊下を進む圭姫の顔には、強い決意が刻まれていた。

「起きるのです」

圭姫の強い口調に、少年は身体を振った。なおも眠りに引きずられそうな少年を、半ば強引に起こした圭姫は、我が子の目を真っ直ぐに見た。

「直ぐに出発の準備をします。急ぎなさい」

眠たそうな眼を手で擦っている少年の前に、孝傑の声は柔らかい。

「苜きよか様、お久しぶりでございます。奠ていの孝傑でございます。外はあいにくの雨でございますが、正に恵みの雨となっております」

「朝早く起こされたのは孝傑殿の差し金ですか。出発するのに雨ではもどかしい。何故恵みの雨ですか」

孝傑は菅乎の問いには答えず、にこつとただけであつた。

出発の準備が整つと、これまで黙々と準備をしてきた圭姫が、強張らせた顔で、

「いいですか菅乎。母は後から追い付きます。先に孝圭殿と出発しなさい」

と、不平は受け付けないという口調で菅乎に迫つた。菅乎は不満げに母を見たが文句を言わず、こくりと頷いた。

今日の母上はいつになく怖いが、眼は何故か淋しそうだ。菅乎は母の横顔を見ながらそう思つた。

空はまだ暗い。もうすぐ夜明だが、厚い雲が日の出の陽光を遮っている。雨は時間と共に勢いを増している。

豪雨の中を突き進む一乗の馬車は、大きく揺れながら猛然と直進する。

「止まれ、止まれ。その馬車よ止まれ」

都の西門で守衛兵に呼び止められた馬車は、馬が大きく前足を宙に投げ出して急停止した。

「奠の商人孝傑でございます。雷明様にはいつも御ひいき頂いております。急ぎの用にて今から奠に舞い戻る次第でございます」

西門の守衛兵は通常十人程度であるが、大雨の中現れた数は実に二百を超えていた。見るからに堅固な陣形で、大雨にもかかわらず兵士一人一人の士気も高そうである。隊長らしき巨漢の男が前に進み出てきて、

「私は主君雷明様から西門の守備を任されております双戈范そうかはんと申します。御高名な奠の豪商孝傑殿が、こんな早朝に御出発とは如何な御用でございますか」

と、腰を低くして言つた。見た目の厳つかさとは違い、双戈范の応対は丁寧である。

「むしろそれはこちらが伺いたいものです。この時間に、一匹の蟻をも通さぬこの大袈裟な警備はいったい何でしょうか」

孝傑は興味津々といった口ぶりで続ける。

「私どもは商人でございますから昼も夜もありません。儲け話があれば寝るのも忘れて駆け巡るのが普通でございます。儲け話を教えると言われて、どうして教えることができますようか」

孝傑は両手を広げて頭を振り、にこりとしてさらに続ける。

「しかし今回はお答え致しましょう。何でも西海岸に鯨という大変大きな魚があがったということです。滅多にないことでして、もし手に入れる事ができましたら大変な儲けが期待できるということでございます」

双戈范は聞き終えたと、眉をへの字にし、浮かない顔で、

「う……ん。困りました。今朝は何人足りとも都の外には出すなどの命令がでております。いかに孝傑殿とて許す訳にはいかんです」

「都内に他国の密偵でも潜伏しましたか。それともどこぞの大夫かが、都内で一暴れでもするのでしょうか」

理由は申し上げれない、と浮かぬ顔の双戈范に、

「勿論ただでは申しません。御通し頂けましたら、相応な謝礼はお約束します」

と、孝傑は声を潜めて付け加えた。

双戈范の表情が緩んだ。それを言われると困るなあと、言葉を濁した顔には、早く次の孝傑の言葉を聴きたいとはつきりと記されていた。

「今は急な事ゆえ余り手持ちがございませんが、手付金と致しまして金二千をお渡し致します。また、無事奠に着きましたら直ぐに御自宅に金二千をお届けしましょう」

と、孝傑はさらりと言った。双戈范の顔がみるみる明るくなった。

「おー、そうまでして此処を通りたいという方をどうして留められましょう。分かりました。お通し致しますよう」

満足した顔の双戈范は部下を呼び、馬車の積み荷を調べさせようとした。

「お待ち下さい」

孝傑は半ば叫ぶような声を出し、積み荷を調べようとした兵士を制し、やや速い口調で、

「やましい物は積んでおりませんが、儲けの種は幾つも積んでおります。積み荷をお調べになるのでしたら先程のお話もなくなりましよう」

と、額にうつすらと汗を浮かべた。双戈范は今まで落ち着いて見えた目の前の男が、狼狽している様を見て取った。金の事は頭の片隅に追いやり、忠勤な男の顔が表れる。双戈范は威圧するように孝傑の眼前に進み、

「もしや誰かをお匿いではないでしょうか。孝傑殿を通すのには目を潰れましょうが、都にお住まいの方となると話は違ってきます。ましてや皇族関係者をお匿いとなれば、孝傑殿、貴方も此処で拘束せざるを得ません」

と、丁寧ではあるが感情を押し殺した声で言った。と、同時に双戈范は部下に合図し、積み荷を調べさせようとした。孝傑の返事を待つつもりはないようである。

上司の命令を受け、二人の兵士が馬車の後部に回った。積み荷を調べる為に馬車の垂れ幕を上げた兵士が、驚嘆の声をあげた。

「ん、どうした。誰か隠れておったか」

双戈范はそう言うが早いか、馬車の後部へと駆け出した。

「なっ、これは、これはまた」

思わず唾をぐくりと飲み込んだ双戈范は、目の前の光景に一時言葉を失った。

馬車の中は、大量の金と豪華な宝品で埋め尽くされていたのだ。

各都に住む市民の平均的な一年の所得は金三百程度である。孝傑が示した金二千とは、上級貴族に属す双戈范にとっても二年は遊んで暮らせる程の大金である。それを孝傑は倍差し上げると言ったのである。しかし孝傑の馬車には、金二万とさらに総額でそれを超える沢山の宝品が積んであったのである。双戈范が今までに見たこともない大金であった。

孝傑は罰が悪そうに、

「まあ、そういうことでございます。積み荷が何か分かれれば、お渡しするとお約束した金の価値が下がってしまいます」

頭を掻きながら孝傑は続ける。

「実はあがった鯨は一頭ではないのです。何頭もあがっております。一頭だけを買うにしても多額の金が必要なんです、数頭買うとなればこれぐらいは必要なんです」

一呼吸置いた孝傑の声が小さくなる。

「あがった鯨を全て買い取ることが儲けの秘密でございます。全ての鯨を競り落とすことができます。鯨の肉は必ず孝傑から買わなければならぬ。そんな状況を作り上げれば、利益は思いのままとなります。また、孝傑が鯨を独り占めすると知られば、何とか阻止しようとする連中のおかげで、出さなくてもいい金を出さなくてはならず、急遽かき集めた金の多さも知られたくなかったのでございます」

さらに孝傑の指が大雨が降りしきる天を指し、せつかくの宝品が雨に濡れて台なしになった場合、誰がその損を補償するのか、と回りの兵士にも聞こえぐらいに声を張り上げた。

「これがお約束の金二千でございます」

戸惑う双戈范に苛立ちを隠さない孝傑が、

「どうか今回の事は御内密に願います。勿論此処にいる部下の方々にも他言しないようお約束して頂きます。その分の金はまた別でお送りすることに致しましょう。ただ、此処をすんなりと御通しして頂くことが、今お渡しした金を始め、全ての前提でございますが」

大京の乱（二）

孝傑の馬車が西門を通過したのと調度同じ時刻、東門に茗軍が到着した。

茗の首都である奠を出発してから七日の強行軍であった。

通常では十三日かかるのであるから、いかに兵を走らせたかがわかる。

さらに最後の一日は大雨の中での行軍であり、肉体的にも精神的にも兵の疲労は限界に達しようとしていた。今回の目的は大京にいる皇族を皆殺しにすることである。一人でも討ち漏らせば作戦は失敗である。茗軍の軍師であり今回の作戦の考案者でもある託岱は、万事は奠から大京への行軍時間で決まると考えていた。茗軍拳兵の報が大京に届くより速く、茗軍は疾風の如く見事に駆け抜けたのである。

「茗軍はまだか」

雷樂は茗軍の到着の報を苛立たしげに待っていた。

予定時刻は過ぎている。自軍だけでも攻め掛かりたい。雷樂ははやる気持ちを押さえるのに必死であった。雷樂の血走る視線が、大雨で霞む大京から外れることはなかった。

「待ちましょう」

軍師の託岱は雷樂に言った。しばし兵を休ませ、茗軍到着と同時に都内に攻め入るよう進言したのである。そして託岱は都内の雷明と打ち合わせる為に、二百の兵を率いて先行した。

天を見上げた託岱の瞳に、大粒の雨滴が突き刺すように降り注いだ。
「よく降る雨だ」

託岱の顔は自信に溢れていた。

夏元に於いて歴史上最も優れた軍師と言え、先ず斗歌^{とか}が挙げられる。昇王朝を開いた初代夏王に仕えた智将である。夏王の以前の名を龍昇^{りゅうしょう}と言い、現在の太京から東へ六キロ程の小さな集落の出身で

あつた。農民から天子へと駆け上がる龍昇だが、それを大いに助けたのが斗歌である。

歴史書を紐解くと、

「龍昇の才は斗歌を旨く使った」

と、先ず記されている。それはそのまま斗歌の功績の大きさを示していると言える。

託岱は晩年になり、この斗歌とよく比較されるようになる。斗歌はその時代を作り上げた人である。託岱もまたこの時代を作り上げる人になるのであつた。

雨脚が弱まつた。託岱は頭上を見上げ、深く息を吸い込んだ。雷明が役割を十分に果たしているようなので一先ず安心した託岱は、さらに大京が完全に封鎖されているかを自らが確認する為に、僅かな従者を連れて都内の各門を回った。

視察中の託岱の足が西門で止まつた。丹念に地面を調べた託岱は、近くの者に西門の警備の責任者を呼ぶように頼んだ。

託岱は目を細め、

「近しい時刻に一乗の馬車が此処を通つた」

と、心の中で呟いた。

やや緊張した面持ちの双戈范が現れた。

託岱も小さい方ではないが、双戈范は大変な巨躯の持ち主で、背丈が託岱の倍近くもあつた。

双戈范は深く頭を下げ、自分よりも十歳下の相手に向かって先に名を告げ、何か御用でしょうか、と相手が目上の人間かのように接してきた。託岱は茗軍の軍師であるが、下級貴族出身であり、現在の役職もさほど高くない。家臣や私兵を持てる大夫ではない。言うなれば大拔擢で、今回の大京攻略により一気に昇進する予定の武将である。双戈范は既に大夫であるので、身分も年齢も上にあたることになる。

「噂に聞く猛将双戈范殿ですね。先の京南での李兄弟との合戦での働きぶりと勇猛は、我が茗にも聞こえております。確かに双戈范殿

なら、あの大賊の首領を討ち取ってもおかしくない」

「恐れ入ります…が、私が討ち取りましたのは、首領の弟で李兼りけんと申す者でございます。」

李兄弟率いる賊は、長兄の李会りかいと次弟の李兼、末弟の李空りくうの兄弟が束ねる大京南方の大賊である。最大時では二百人を超える賊であったが、先日双戈范率いる大京軍の前に大敗して現在は二、三十人になっている。

勇猛であるが謙虚な男だ。双戈范に対する託岱の最初の感想であった。一般に勇猛な男は自分を誇り過ぎると思っている託岱にとって、双戈范の応対は意外であった。

「双戈范殿に一つお聞ききたい」

相手を威圧するようなものではなく、むしろ親しみを込めた言い方であった。

「近い時間に西門を通過した車がありますね」

車とは馬車のことである。

「いえ、ありません」

即答である。

「ではこれは何でしょう」

屈み込んだ託岱は、大雨でぐちゃぐちゃになっている地面に僅かに残る車輪跡を指して言った。そこは調度門扉の真下であり、雨が直接あたることはない。

「存じませんが…」

双戈范は言葉を濁した。その目は車輪の跡をじつと見ている。

「西門を通過した車がありますね」

託岱はもう一度聞いた。はっきりとはないが、車輪と判別するのに十分な跡である。恐らく双戈范自身この跡に今初めて気付いたのだろう。何かあったに違いない。託岱は断言した。

「双戈范殿…」

託岱は訴えるような視線で言葉を続ける。

「この跡は紛れも無く昨夜から今朝にかけてのものです。知らぬ存

「ぜぬでは通用しませんぞ」

「昨夜以前のものではない、とは言いつれなにかと思われませんが」
双戈范の声にも表情にも動揺は見られない。託岱には堂々とし過ぎているとすら映った。

「雷明殿はこの事実をご存知でしょうか。もしまだなら私からご報告致しますが」

「昨夜から西門を通過したものはないとご報告下さい。それ以前のことについては私の管理外のこと故、ご自由にして下さい」

託岱はこれ以上この男を追求しても無駄だと思った。多言を用いて隠蔽する者ならたやすいが……。託岱は必要限しか喋らない双戈范の前に苛立った。誰かが西門を通過したのは間違いない。その事実を隠すのが双戈范個人なのか、雷明の指示なのかわからないが、何と無く双戈范個人のように思えた。

金だな。託岱の直感がそう言った。例え雷明に報告しても無駄であろう。雷明が家臣の言を信用するのは明らかだからだ。

託岱は胸騒ぎを覚えつつ西門を後にした。

雷楽に拝謁した託岱は、万事が順調であり、先程到着した菟軍と共によいよ都内に進行すべきと告げた。雷楽は表情を引き締め、深く息を吸った。

「全軍に伝えよ。静かにそして迅速に行軍を開始する、とな」

託岱は行軍開始の伝達中に、趙孟ちやうもつの元を訪れた。趙孟は雷楽の片腕と言つてよいが、奥の手と言つた方が分かりやすい。ようは暗殺等の裏の仕事を担当する汚れ役である。

「軍師殿がお越しとは、我が軍にとつては不吉ですな」

上背はないが、鍛えられた筋肉が盛り上がり逞しい。年齢は五十五歳だが血色がよく、どう見ても四十代前半にしか見えない。顔は精悍で爽やかである。この人ならば任務で何のためらいもなく人を殺せるだろう、と託岱は思う。この人が悩んだり苦しんだりしていることが想像出来ないからだ。

「危惧するまでもないことなのですが……」

託岱は趙孟に二人だけで話がしたいと目配せした。趙孟が配下を下がらせると、

「一つ頼みたいのですが」

と、託岱は切り出した。

「何分内密なこととして、主君にも秘密にて行つて頂きたいのです」

「ほー、我が君にも秘密とは何事でしょう」

主君に秘密と聴いて、むしろ趙孟は嬉しそつであつた。まだ家臣を持てる身分にない託岱には、主君に秘密で人を使うことができない信用できる誰かに頼むしかないのである。

やはりこの人は信用できる。趙孟の反応に満足した託岱は、西門で見聞きした事について語り始めた。事実のみを話し、私見は一切加えなかつた。託岱の話最後まで聞いた趙孟は、

「双戈范については、人が知っているぐらいのことは知っている。

おそらく金だろう。あの男は命令には忠実だが、金が絡むと人間が変わると聞いたことがあるからだ」

と、真面目な顔で言つた。

「金ですか……。任務の重さを理解しているでしょうから、少額の金では動かないでしょう。やはり皇族の誰かが高額の金を使い都外に脱出したのでしょうか」

「どうだろうか。そうかもしれないが、違つような気がする。いくら金を積まれても、皇族を逃がすとは考え難い。後から露見する可能性も考えれば、双戈范が逃がしたのは皇族ではあるまい。ただ、皇族の関係者である可能性はある」

「双戈范の言が事実であり、車が西門を通過したのは昨夜以前ということはありませんまいか」

「それはなかるう。昨夜からかなり降っているらしいから、雨の降る前にできた跡では消えておるう」

趙孟はにやりとして、

「貴殿はわしを試しておられる」と、言つた。

「自分の判断が正しいか確認している、が正解でございましょう」と、託岱もにやりとした。ふんつと、鼻息を吐いた趙孟の顔は明るい。二人には通じ合うものがあるのだろう。

「それでその車の行方を突き止めてほしいと言うのだな」

「ご推察の通りです。具体的な探し方や見つけた後の処置についてはそちらにお任せ致します」

趙孟は頷き、

「息子にやらせよう」

と言い、両手を叩いた。

「趙孟殿……」

託岱は苦い顔で相手を睨んだが、直ぐに様相を崩して、親しみのある表情になった。天幕が二重構造になっており、中から一人の青年が現れたのだ。託岱と趙孟の話を聴いていたに違いなかった。

「息子の趙羽^{ちやう}だ。わしの末子であり、息子達の中で一番出来が良いわしが直接にすると大差ない仕事をする奴だ。信用してやってくれ」

趙羽はまだ二十歳に達していない。

つまり成人していない若者を託岱に貸したことになる。

これには、将来の宰相になるであろう託岱とより深い関係を築きたい趙孟の狙いがあった。

この時代、息子が成人すれば将来性のある上司の子や次期君主になる大子、または君主の他の息子達に付けるのが普通であった。趙孟には他に息子が三人いるが、既に雷樂の息子達に付けている。残っているのは未成年である趙羽だけであった。趙孟は、趙羽が成人する三年後には既に託岱が夏元の宰相に就いていると考えている。

今のうちに趙羽を託岱の側に置いた方が良い。趙家にとって今日託岱が来た事は、正に天与に違いない。

趙孟は今日、趙家の未来が開けたように感じていた。実際に趙羽は息子達の中で一番見所があり、託岱を満足させるだけの自信もあった。

「今回だけでなく、この先も趙羽を使ってくれ。いろいろと役に立つはずだ。」

羽よ今から託岱殿を主君とし助けよ」

託岱は予想もしない趙孟の申し出に戸惑った。私に家臣が……。しかも自分より身分が遥かに上の趙家の人間である。最下級の貴族に生まれ、今日までの苦勞を思いだした託岱の目が涙で潤んだ。

「申し訳ありません。余りに唐突な申し出に言葉を失いました。大変有り難いお話ですが、私は家臣を持てる身分ではございません。御子息はもつと他の有力者に預けた方が良いのではありますまいか。第一私の俸禄で御子息を養うことはできないかと存じます」

趙孟は豪快に笑い、

「こんな鼻垂れに俸禄などいらん。成人してからで十分じゃ」と、趙羽の頭を押さえ付けた。趙羽は不機嫌な顔で父を睨んだ。

「わしは託岱殿の将来性に投資するのだ。素直に受けなされ」

深々と頭を下げた託岱の体が、感動で震えていた。託岱に初めての家臣ができた瞬間であった。

「東には我が軍、南には菟軍がある。残りは北と西だが、北は夏奥かおう山脈があり、この雨で地盤が緩んで通り抜けるには危険が伴う。素直に西に向かったと考えるべきだな」

趙孟の見解に託岱も賛成であった。

「羽よ、そちは西門より車輪の跡を追ひ西に向かえ。念のため北にも人を出すが情報を集めるだけにする」

趙羽は澄ました顔で、

「私の主君は託岱様です。もう父上の指図は受けません」

と、声を大にして言った。

「好きにしろ」

趙孟の声は明るかった。

大京に入った茗菟連合軍は静かに宮殿を取り囲んだ。雷樂の号令にて始まった宮殿襲撃は熾烈を極めた。

「宮殿内にいる人間は、皇族や従僕、女や子供に関係なく全てその場で首を撥ねよ。降伏する者にも容赦はするな」

雷楽の命令は徹底された。襲撃は茗軍が行い、菟軍は宮殿から逃げ出る人々を、宮殿の外で待ち構えて殺していった。

大京の乱では、雨であることは別の理由で火は使われなかった。普通火を用いれば、火と煙の両方で多くの敵を倒すことができ効率が良いとされている。

さらに退路で待ち伏せすれば、敵を捕虜とすることもたやすい。

宮殿攻めにおいて火計は基本であった。

が、今回の目的は宮殿内の人間を皆殺しにすることであり、捕虜は必要ないのである。また、一人の討ち漏れも許されない状況で、煙や火に紛れて逃走されることを恐れなければならない。その為今回火計は用いられなかったが、それが大京の乱を歴史上最も残忍な事件の一つに数えさせることになるのであった。

宮殿を護る役目の近衛兵は圧倒的な数の敵を前に戦意を喪失し、我先と逃げ出したが、結局は外で待ち構える菟軍の前に全滅した。

宮殿内では、おびただしい鮮血が床や壁を真っ赤に染め、散乱した赤黒い死体からは血の臭いやら悪臭やらが立ち上り、泣いて叫ぶ断末魔の声が途切れることはなかった。

降伏が許されないことは悲劇としか言いようがない。後宮内に進入した兵は、懇願する無抵抗の女子供に、戈と戟を浴びせ続けた。中には、悲惨な光景を目の当たりにして手を止める兵もいたが、次から次へと湧いて出る兵の流れの中では、何の意味もを為さなかった。人一人の首が撥ねられて撒き散る血の量を想像できるだろうか。宮殿内は正に地獄と化したのだ。

襲撃から四時間半、宮殿の最も奥にて、昇王朝最期の天子昇虎の死体が発見された。悪政を尽くした虎王であったが、最期は自らの頸を切つての自害であった。虎王の死が確認された後も、茗菟連合軍の殺戮が止むことはなかった。結局宮殿に暮らす三千人以上の人間が殺され、身元を確認された。

宮殿の上空には、どんよりと重たい濁った空気が、風に流されることなく漂っていた。まるで死者の怨念が漂っているように。

京南の狼（一）

風が強い。孝傑は手綱を硬く持ち直した。雨は勢いを失いつつあるが、強風が孝傑の顔面に突き刺すような雨滴を浴びせる。

本当にこれで良かったのだろうか。

孝傑は車を走らせながらそればかり考えていた。後悔とはまた違う。前向きな思考の中で、もがいているのである。

何をしに大京を訪れたのか。圭姫様を救うはずではなかったか。もっと良い方法が他にあったのではないか。菅乎様だけでなく圭姫様をも助け出す方法が……。孝傑の脳裏に先刻の圭姫の凜々しい顔が浮かぶ。

「　　都は既に茗主力の兵に取り囲まれております」

孝傑がもたらした凶報に、圭姫は溜息と共に力無く肩を落とした。

「茗軍の目的は虎王個人ではなく王朝そのものです。全ての皇族が処刑されると思われます。」

情報によりますと、皇族を取り逃がさない為に宮殿内にいる人間を皆殺しにする計画であるとか」

圭姫は俯いたまま、直ぐには言葉を発しなかった。僅かな時間の沈黙は、圭姫が死への覚悟を決めているのか、生への道を手繰り寄せているのか、孝傑にそのどちらかであろうと推量させた。

圭姫は姿勢を正すと、

「菅乎をお願いします」

と、固い決意を言葉に乗せてはつきりと言った。そして、静かに額を床に擦り付けた。

ああ……やはり圭姫様はそういう方であるか。孝傑の胸は熱くなった。圭姫のその一言は、暗に圭姫がここに残ることを意味しているのである。孝傑は、

「圭姫様……」

と、声を震わせた。

圭姫は頭を上げた。その顔は潔い爽やかさで、孝傑がかつて見たこともない程に美しかった。

天下にこれ程哀しく美しい顔をなさる女性がいるであろうか。気付けば孝傑の目から、熱い液体が流れ落ちていた。

「この方は、まさに天上に咲く一輪の花だ」

孝傑は心の中でそう言葉を発した。

孝傑は目を閉じ、

「孝傑は、圭姫様を救いとうございます。また、その為に此処に来たのでございます」

と、感情を込めて言った。知り合って十年、王の妾とその出入り商人という関係の枠に収まらず、二人は信頼できるよき友であった。

いや、正確には親子のような関係であったのだ。圭姫は孝傑を父のように慕い、孝傑は圭姫を我が子のように愛した。

孝傑は圭姫の清らかな瞳に吸い込まれる錯覚に陥り、次の言葉を発することができなかった。圭姫は優しく微笑み、

「ありがとう。でも孝傑殿、私が此処に残ることは天命でございましょう。もう随分前から、いつかこのような日が来ることは分かっております。

虎王の悪政を止めさせられなかった私にも非があるのです。王朝の中心にいる者として、既に覚悟はできております。いえ、悪政の為に亡くなった多くの方々や、今も苦しく辛い生活を強いられている国民に対して、やっと責任をとることができましょう」

と、言った。声は柔らかかで、聞く者の耳に心地よく響く。孝傑の哀しみを緩和する効果もあつたに違いない。そして大きく息を吸い込み、

「此処には今まで私や苴乎を支えてくれた侍女や従僕が十一人住んでいます。その人達をおいて私達だけが逃げるなど許されることではないでしょう。

でも」

と、圭姫は言葉を詰まらせ、眼差しを落とし、

「でも、苳乎には生きて欲しい」

と、最後に力を込めて言った。我が子の未来を切実に願う母の顔がそこにはあった。

結局孝傑は、圭姫に無言で頷くことしかできなかった。

必ず苳乎様を生かす。孝傑はようやく気持ちの整理を終えた。

孝傑は車を走らせながら、休憩できそうな場所を探した。強風が止み、天候は回復への道を見付けたようであった。

西門から出た孝傑の車は一旦西に向かい、大きく迂回して南へ進んだ。大京の南には大きな平原が広がり、その先の森林には幾つもの集落が点在している。森林に入る手前には砦があり、街道が東西南北に交差していた。

孝傑は適当な大木を見つけて車を入れた。太陽が出ていれば、既に西の空低くにある時間である。空は相変わらず分厚い雨雲で覆われていたが、雨は殆ど止んでいる。

「苳乎様、一旦休憩致しましょう。此処まで来れば、もうお出になつても大丈夫でしょう」

積み荷の中から、苳乎の小さな腕が現れた。宝品を掻き分けながら荷台から出てきた少年の表情は険しかった。口を一字にして無言で孝傑を睨む苳乎の手には、豪華な飾りの付いた短刀が握られていた。

孝傑は両膝を揃えて地面につけ、深く頭を下げた。

「先に孝傑のお話をお聞き下さいませ。孝傑をお切りになるのは、その後にして頂きますよう」

「母上は何処にいますか。母上から孝傑殿がいいと言うまで荷台に隠れておれと言われたので、何も分らずに隠れておりましたが、かなりの時間が経ちました。苳乎はいたい何処にいるのでしょうか。孝傑殿は母上を殺して苳乎を誘拐したのではないのでしょうか」

「圭姫様はご無事でございます。が、大京は茗軍に囲まれ、宮殿は

襲撃さたと存じ上げます」

孝傑は敢えて圭姫が無事だと告げた。まだ十二歳の少年に、全てを受け止めるだけの器がないことは明白であるからだ。

「母上は何処にいますか」

「圭姫様はまだ大京にいらっしゃいます。襲撃前には宮殿から脱出したと思われます。その後は都内の民家に匿われていることと存じ上げます」

孝傑がその場凌ぎでついたこの作り話は、実は孝傑の知らぬ間に本当の事になっていた。

圭姫は孝傑と苜乎を送り出した後直ぐに使用人全員を呼び、

「これから宮殿が襲われます。皆さんは今から直ぐにお逃げなさい」と、皆に宮殿からの脱出を促した。皆一様に青い顔をして絶句したが、先程孝傑を案内し、多少なりとも心の準備をしていた一人の侍女が、

「圭姫様はどうなさるのでしょうか」

と、圭姫に向かって言うと、場の空気は一変した。皆の顔がさつと上がり、どれも主人を心配している顔であった。

「私は自分の責任を果たさなければなりません」

「圭姫様がお残りになるのであれば、私もお供させて頂きます」
従僕の一人がそう言うて頭を下げた。圭姫に仕える十一人の者達は、次々と頭を下げていった。

「何を馬鹿な……。貴方達はお逃げなさい。殺されますよ」

圭姫は眉間に皺を寄せた。その後圭姫が懸命に説得を続けるも、誰一人として腰を上げる者はいなかった。

「圭姫様、何と言われようが、最後まで圭姫様についていきます。それは皆同じ気持ちでございます」

使用人達は頷いた。

圭姫がいかに回りの人々に愛されていたのかがわかるであろう。しかし回りの人々に言わせれば、それはいかに圭姫が回りの人々を愛

したかが分かるというものであった。

「皆さんの意志は固いようですね」

そう言った圭姫は、溜息と共に破顔した。

「分かりました。では私も宮殿を出ましよう。ですから、至急出発の準備をして下さい」

圭姫と彼女に仕える十一人は六組に分かれて、間隔をあけながら宮殿を出た。大雨の中で、裏口から出る圭姫達を見つける者はいなかった。

圭姫は使用人の老夫婦と行動を共にした。先導されてたどり着いた先は、都内にある老夫婦の息子の家であった。全身ずぶ濡れの三人は、辺りの静寂を壊すことなく静かに家の中へと消えていった。

昔乎は短刀を突き出した。

「何故母上だけをとに残したのですか」

短刀は孝傑の眼前でぴたりと制止した。

「圭姫様は孝傑に、昔乎様を無事逃がすようお申し付けました。ご自身は、侍女や従僕の方々を逃がしてからと……」

「母上は本当にご無事でしょうか」

「時間的には十分余裕がございます。ご無事であると考えるべきでございます」

短刀は孝傑の顔から遠ざかった。

「母上……」

昔乎は空を見上げ、天に祈った。

どうかご無事で。

孝傑は南に目を向けながら、此処から南に進み、砦の手前で東に向かうことを昔乎に教えた。

「奠^{てい}に行くのですね」

昔乎は頭を働かせた。孝傑は多少の驚きを持って昔乎の顔を見た。これほど大人であったか。

子供だと思っていた苺乎の顔は、少年から青年へと移り変わる過程であった。平穏な宮殿暮らしから、明日のことさえ分からない現況の変化に、苺乎の中に流れる英傑の血が、少年を劇的に成長させたのかも知れない。孝傑は苺乎に大器の片鱗を見た。まだほんの小さな芽であるが、やがては大木となり、夏元かげんの真ん中に置かれるのではないか。

苺乎の服はみすばらしい。だが高貴な色は失っていた。孝傑は大京脱出の際に、苺乎の服を商人のものに着替えさせていた。万が一苺乎が見つかったても、店の従業員であるとしらをきる為である。商人には見えんな。孝傑は苦笑した。

「奠へ向かいますが、少々険しい道を通ります。南にある砦から東に道がありますが、砦に行けば身元を確かめられ、場合によっては拘束されるかも知れません。ですから砦の手前で東に進路をとりますが、道なき道を進むことになります」

「今日はどこで寝るのでしょうか」

「獣が徘徊する野でございます。奠迄は七、八日かかりますので、その内の三日は山野にて我慢して頂くことになります。食糧は十分ございますが、宮殿でのお食事とは違いますので、お許し頂かなければなりません」

「苺乎は構いません。それから、折角このような服を着ているのですから、苺乎を孝傑殿の使用人としてお使い下さい。どうせ人に会えばそうしろと言うのでしょうか。まさか、また荷台に隠れておれとは言わないですよね」

苺乎は明るい声を出した。

母のことを心配すれば、どこまでも沈み込んでしまいそうで、努めて考えないようにした結果であろう。孝傑は小さな感動を覚え、同時に、圭姫が奇跡的に無事であることを切に願った。二人を乗せた馬車は、薄闇の中を疾走する。孝傑の隣で苺乎が眠っている。少年らしいあどけない寝顔に、孝傑の張り詰めていた気が一瞬緩んだが、直ぐに気持ちを締め直し、南東の方角を注視した。

もう見えても良いはずだが……。何かあったと考えるべきか。不安をよそに、孝傑は馬に鞭を入れた。

月のない夜であった。暗闇が続く前方に、砦の明かりがぼんやりと見えた。馬車には炬火がくくりつけられており、孝傑は砦の見張りの視界に入る手前で進路を東にとった。

会えなかった……。やむを得まい。このまま進むしかなかろう。孝傑は見切りをつけて、馬車の扱いに集中した。

道を外れた馬車は荒れ地に大きく揺れた。孝傑は速度を落としながら、慎重に地面を選んで、巧に転倒を避けていった。隣で寝ていた菅乎は、大きな窪地で小さな悲鳴を發したが、次には両手で車を掴み、何事もないような平静を装った。

馬車は林道に入り、道なりに暫く進んだ後、脇に逸れて停止した。

「今夜は此処で寝るとしましょう。今から簡単な食事を用意致しますので、菅乎様は火を焚く薪を集めて下さい。それから、この炬火の見えぬ所へは決して行かぬようお願い致します」

疲れも手伝ってか、二人は食事を終えると直ぐに眠気に襲われた。

菅乎は孝傑が気がついた時には既に寝息をたてていたし、孝傑も素早く寝所を整えると、倒れるように眠りについた。

夜は長い。眠れば一瞬であるが、夜通し起きていれば、確かにその時間が存在することに気が付くであろう。しかし、疲労困憊である今の孝傑と菅乎にとって、今夜という時はあつという間に過ぎることになる。深い睡眠は、残り少なくなっていた二人の体力を回復するのに必要であった。

奠から大京迄これ以上ない速さで移動し、休む間もなく大京から此処まで馬車を走らせてきた孝傑に、今夜の警戒を怠るなどは酷な話であろう。夜半、炬火の明かりを指して近づく者達に、孝傑が気付かなかったことは致し方ないだろう。孝傑と菅乎が目覚めますのは、太陽が東の地平線から顔を覗かせた直後である。初めに異変に気付いたのは菅乎である。寝起きとは思えぬ大声で、

「孝傑殿」

と、昔乎は叫んだ。びくつとして目を開いた孝傑に、

「大変です。早く起きて下さい。早く、早く」

と、昔乎はまくし立てた。孝傑は何事かと、素早く辺りを見回した。

「これは」

孝傑は言葉を失った。まだまどろむ孝傑の思考回路に電撃が走る。

「孝傑殿、どうしましょう……」

うなだれる昔乎の視線の先には、草村に大人しく佇む二頭の馬があるだけで、本来あるべきものがなかった。それは二人が乗ってきた車であり、大量の金と宝品を積んだ車であった。馬と切り離された車は、跡形もなく消え去っていたのである。

「車が消えました。何と言うことでしょうか。これからどうなるのでしょうか」

昔乎の落胆は、少年の目に涙を潤ませた。

昔乎は金や宝品、食糧がなくなったことに、今後の不安を募らせたのだ。

だが孝傑は、予期せぬ不幸ではあるが、それよりも昔乎の命が無事であったことに安堵していた。

昨夜は無事であったが、今日も無事である保証はない。

孝傑はまだ鈍い頭を懸命に働かせた。

車がひとりでにこの場を離れる筈はない。

荷物を積んだ車には重量があり、数人で運び去るか馬が必要であったに違いない。だがこちらの馬が無事だと言うことは……。孝傑は立ち上がり、警戒しながら辺りの様子を探った。草花や木葉が春の気持ちの良い朝風になびくだけで、人や獣の気配はなかった。二頭の馬に異常がないことを確認した孝傑は、丹念に地面を調べた始めた。

「昔乎様、直ぐにこの場を離れましょう」

孝傑の声は冷静であった。不安げな顔で頷く昔乎に、

「どうやら寝ている間に夜盗が現れたようです。荷は盗まれましたが、命を盗られなかったのは天の加護があったからでございまして

う。馬も無事でございます。そう悲観なさることはございません。」と、孝傑は言い、にこりとした。

孝傑の口調と表情は相変わらず柔らかい。

「何らかの理由で、夜盗が戻ってくるかも知れません。急ぎましよう」

苜乎はそう聞いて、夜盗が戻ってくるなら、捕まえて荷を取り返せるのではないかと、思ったが、口には出さなかった。自分が考えることは既に孝傑は考えているだろうし、何より孝傑を信頼する気持ちが強かったからだ。

孝傑殿は信頼できる。苜乎はこれから先何があるかと、自分がどう考えようと、孝傑の言うことに従うことを決心した。母を陰ながら援助してきた大商人に、苜乎は大きな信頼と、計り知れない尊敬の念を抱いていたのである。

孝傑は元氣のない方の馬に苜乎を乗せ、二頭の手綱を引いて自分は歩いた。

朝から風が心地良い。

薄い雲が空を覆っていたが、春風はそれらを吹き飛ばし、昼には空を青くしてくれそうだ。

孝傑は天候に敏感であり、天候を予測することに非凡であった。

商人として天候を読む力は必須ではないが、習得していればかなり有利である。

例えば、午後から雨が降ることが分かれば、午後からの客足が鈍ると予想でき、午前中になまものの値段を下げて売り切ってしまうことができるし、他の町に物資を運ぶのに天候が分かれば、かかる日数を正確に計算できて勝手が良い。天候の良し悪しで農作物の出来が変わってくるが、それは農作物の値段を変動させる大きな原因の一つであり、農家から買い取り庶民に売る商人にとっては、目の付け所でもある。

今日が快晴であると見当をつけた孝傑は、今日の自分達にも明るいものを感じていた。

「先ずは集落を探して食を分けてもらいましょう。腹ごしらえをして、南にある新那しんなを目指すことに致します」

孝傑の話に馬上の苜乎が力無く頷く。

「さあ、さあ、元気を出しましょう。ご覧下さい。小鳥が元気に飛び回っているではありませんか。きつと雨が止んで、やつと羽を広げられると嬉しいのでございましょう」

孝傑は道すがら、苜乎に動物や昆虫についての様々な話を聞かせた。未知なる話に、苜乎は次第に夢中になった。

蛙の子は手足がないなんて本当だろうか。熊が冬眠するとはどういうことか。苜乎は疑問があれば何でも聞いた。昨日の朝以来、ようやく苜乎に笑顔が戻った。久々に見た苜乎の白い歯に、孝傑は明るい予感が早くも的中したと喜んだ。

雲が薄れ、太陽が湿った大地を本格的に乾かし始めた。道なりを明るく話す二人の影は、愉快に踊っているようであった。南にゆるりと道を進める二人は、東、西、北の三方から、自分達を猛追する者達がいることを知るよしもなかった。

林が突然の強風に大きく揺れた。孝傑と苜乎の会話は一瞬止まったが、また直ぐに再開された。風は昨日の勢いを盛り返すように、段々と強くなっていた。

京南の狼（二）

孝傑と苜乎は那の北方に入った。那は茗^{めい}や菟^と、大京のある常^{たいしん}振と同一ような地方の名称である。那の真ん中辺りにある首都新那には孝傑の店はないが、取引のある豪商^{いせうま}劉馬の本店があった。孝傑は奠に行くのに、劉馬の援助を受けようというのである。

新那に行けば何とかなる。孝傑はそう考えていた。

遠くに小さな集落が見えた。

思ったよりも早く集落が見つかり、孝傑は胸を撫で下ろした。太陽はまだ頂上に達していない。正午過ぎには食にあり着けそうだと見当した孝傑の足は、棒のようになっていた。早朝から二頭の馬を引き、休むことなく歩き続ける孝傑も、六十四歳という年齢には勝てなかった。それでも、苜乎に足の疲れを悟られることなく、孝傑の足は前へ前へと出続けた。

何としても苜乎様を守り抜く。車が盗まれたことで、奠に着くまでは安心できぬという気持ちが一層強くなっていた。

近付いてみると、集落は一軒家であった。家は粗末であったが、周囲の田畑は広くて手入れが行き届いており裕福そうであった。一世帯で賄うには広すぎる田畑であるが、質は非常に高いと孝傑は思った。

普通集落は邑^{まち}の周辺にできるものである。邑には人と物資、情報等様々なものが集まる。主に農耕で暮らす集落の人々にとっても、邑が近くになればやはり不便であった。

一番近い邑まで歩いて二日はかかる。頭の中の地図に照らし合わせると、前方の集落は常識はずれの位置だと言えた。何か訳ありの人物が住んでいるかもしれないと考えなくもないが、良く行き届いた田畑を見る限り、悪人が住んでいるとは思えなかった。

田畑に人が見えた。孝傑は苜乎を素早く馬から降ろし、

「全て孝傑にお任せ下さい」

と、笑顔で優しく頷くと、昔乎も笑顔で返事した。

二人の男が田畑にいた。孝傑と昔乎の姿を見取ると、二人の内大きい方の男が近付いてきた。岩が動いていると昔乎が錯覚する程に、男は大きくて威つい体躯の持ち主であつた。

「何かご用か」

眉が太いが顎も太い。身体と同じような威つい顔である。左頬には十字の傷痕があり、それが勇ましさをより増していた。

「おい、何か言ったらどうだ。耳が悪いのか」

男の風貌に圧倒されて返事が遅れた孝傑は、

「失礼致しました。奠の商人で孝傑と申します」

と、商人らしい腰の低さで相手に対した。

「商人が何か用か」

見た目と同じ、声も武骨である。

「はい。申し訳ありませんが、食を分けて頂けませんか」

「食だと」

男は胡散臭そうに孝傑を観察した。

「まあいいわい。害はなさそうだから主に合わせよう。ついてこい」

男は背中を見せ、歩き始めた。

「主よ、客だ。迷子にでもなったのか知れねえが、食を分けて欲しいだよ」

大男が三十代前半なのに対して、主と呼ばれる男はまだ二十歳そこそこの青年と言つてよかつた。眉目に涼しさがあり、青年の顔は秀丽である。才能を鼻にかけるのではなく、むしろ隠しているが溢れ出てしまうかのような印象を受けた。農民の服装をしているのが、かえつてこの青年の才を際立たせている。胆知に優れているとはこういうことであろう。青年を一目見た孝傑はそう思った。

「此処には十分な食糧がございます。好きなだけお持ち頂いて構いません。さぞお疲れのことでしょう。差し出がましくなければお泊り頂いて、ささやかな宴を設けましょう。旅の話をして頂ければ幸いです」

気持ちの良い声だ。孝傑は好感を持った。丁寧に御礼を述べた孝傑は、

「昼ご飯のみで結構でございます。先を急ぎますので」

と、宿泊については断った。青年は特に気分を害したようには見え
ず、ただ残念そうな顔をした。

孝傑と苜乎は青年に招かれて食事をとった。食事は質素なものであ
ったが、その分量が多くて豪華とも言えた。苜乎は初めて食べる田
舎料理に大いに喜んで、箸を忙しく動かした。

「まだお名前を伺っていませんでした。必ず御礼を致しますので、
お聴かせ願いませんか」

「地方のしがたない農民でございますので」

青年は苦笑いで答えた。

「此処で私が貴方達にしたことは、何も見返りを求めていることでは
ございません。縁があればまたお会いもしましょう。その時に私が
困っていれば、お助け頂ければ有り難い事です」

青年の謙虚な姿に感動した孝傑は、落ち着いたら必ず御礼をしよう、
と心に誓った。孝傑は後に青年に金を贈るが、この青年の自宅には
既に誰も住んでおらず、結局青年の恩に報いることができなかった。
青年への恩返しは、後に苜乎が意外な形で果たすことになるが、そ
れは此処にいる誰もが想像すらできないことであつた。

「新那の劉馬殿をお尋ねでございますか」

孝傑から行き先を聞いた青年はそう言つて、隣の大男と目を合わせ
た。

「劉孟^{リウモン}が留守で良かった」

と、ぼつりと言つた大男は、しまった、という顔で青年から目を逸
らした。青年の片眉が少し上がった。青年は孝傑の方を向いて、

「今のは聞かなかったことにして下さい」

と、言つた。

「最近歳のせいか耳が急に遠くなる場合がございます」

孝傑は素知らぬ顔でそう言つた。劉孟について、孝傑は口外するつ

もりのないことを暗に伝えた。

劉孟は劉馬の嫡男である。

何よりも利を求める父親の姿勢に反発して三十歳で家を出た。それから十八年の歳月が過ぎたが、その間劉馬はずっと行方知れずの我が子を探していた。

劉孟の行動が、劉馬に利より大切なことがあることを気付かせたのである。劉馬ができれば劉孟に家督を譲りたいと言っているのを、孝傑は耳にしたことがあった。劉馬に劉孟の所在を教えてあげたいが、劉孟にも事情があり、実際に彼と会って話をするまでは軽率な行動はしない方が良く、と孝傑は考えた。勿論恩ある青年から口止めされている為でもあったが。

「そろそろ出発致します。このご恩は必ずお返しを致します」
大雨の為に地面が緩く、車が大きく揺れたこと等、差し障りのない事柄を選んで話をした孝傑はそう言って立ち上がった。

別れ際に孝傑は、

「どうかこの馬を受け取って下さい。今は疲れていて覇気がありませんが、召来産しやらいさんの良く走る馬でございます。一日休めばきつとお役に立ちましょう」

と、言つて昔乎を此処まで乗せてきた馬の方を青年に差し出した。

「今は他の者が使っているのではありませんが、二頭の馬を持っています。三頭は必要ありませんので、そのままお持ち下さい。それにこの食糧を運ぶのには、馬は二頭あった方が心強い」

孝傑と青年はなかなか折れなかったが、孝傑は遂に青年に押し切られて馬の手綱に手を伸ばした。

腹を満たした孝傑と昔乎は、二日分の食糧を得て集落を後にした。青年の名が先清せんしん、大男の名が勝卻かつげきであり、先清の父の先尚せんしょうと劉孟も共に此処で生活していたことを孝傑が知るのには、これから五年後のことであつた。

孝傑と昔乎が出発した一時間後に、先尚と劉孟が帰宅した。

「父上、莫の商人で孝傑という方をご存知でしょうか。なかなか立

派な人でございました」

「奠の孝傑と言えば、義に厚く、庶民から絶大な人気を誇る大商人だと聞く。何故孝傑は此処を訪れたのか」

先清は孝傑が車ごと積み荷を盗まれ、食に困っていた事を父に話した。

「孝傑は北から来たのか」

先尚は何かに思い当たったようで、

「誰かお連れがいなかったか」

と、先清に聞いた。

「そう言えば子供の使用人を一人連れておりましたが、この子供もなかなかの人相をしておりました」

先尚はしばらく考え込んでいたが、

「大京が茗菟連合軍に占拠されたらしい」

と、それだけ言うと、後は自分で考えろとばかりに、先清に背を向け会話を終わらせた。

孝傑殿と何の関係があるのだろうか。先清は訝しげに父の背中を見た。夕食の支度をしている時に、勝卻は近くで米を炊いている劉孟に罰の悪い顔で話し掛けた。

「実は孝傑とか言う商人が居る時に、うっかりお主の名を出してしもつてなあ。なあに、先清様が口止めしてくれたから、大丈夫だとは思うがのお……」

劉孟は一瞬むっとしたが、直ぐに笑い顔を作って、

「先清様が口止めして下さったなら間違いはなかるう。奠の孝傑と言えば大人物だ。約束は守ろうよ」

と言って、心配顔で見詰める友人を安心させた。口ではそう言った劉孟であったが、内心穏やかではなかった。

己の利益の為なら平気で約束を反故するのが商人というものだ。父の薄汚い商いを思い出して、劉孟は憂鬱になった。

そろそろ新たな旅に出る時期なのかもしれない。

少し前まで、夏元^{かげん}には三人の賢者がいると言われていた。

華西^{かせい}の諸侯^{たいびんし}大旻^{しや}師^しに莎^{しや}の宰相^{さいしやう}漕雷^{そうらい}、そして那^なの宰相^{さいしやう}先尚^{せんしやう}である。先尚は一年前に引退して、今は那^なの北方で静かな隠棲生活をおくっている。自らの家を出た劉孟は何処に落ち着くでもなくずっと旅をしてきたが、以前より尊敬していた先尚が人里離れた山間部で土にまみれて生活していると聞いて、是非教示を受けたいと先尚の元を訪れたのだ。

あれから九ヶ月が過ぎた。劉孟は旅立つべきか迷っていた。

食糧を一方の馬に括り付け、もう一頭に孝傑と苴乎が乗る道すがら、苴乎はすっかり明るさを取り戻していた。苴乎は初めて見た農民の生活に驚いて、興味津々といった感で孝傑に質問を浴びせた。

孝傑が話し上手なこともあり、二人の間には笑いが永遠に止まないように感じられた。が、後方からの急接近する騎馬の群れが出す騒音に、二人は会話を止めて振り向いた。

「見えたぞ。あれだ」

一人が狂喜の雄叫びをあげた。つられて何人かが大声を張り上げる。賊は全員が騎馬である。二十騎の騎馬が前方の孝傑と苴乎を猛追する。怒声をあげながら突き進む騎馬の群は、草木を荒々しく踏み潰しながら一直線に獲物を目指す。

「命を拾ったわ」

先頭の男が叫んだ。賊の頭は李会^{りかい}である。李会は先頭を走る五人に、「見つからねば死ね」

と、言葉を投げていた。

先頭の五人は夜半に進む馬車を見つけて、ひそかに後を追った。孝傑と苴乎が眠るのを見届けると、五人は車を馬から引き離して持ち出したのだ。暗闇の中で積み荷を確認することはなかったが、まさかあれ程の財が積まれていようなど考えもしなかった。

「おまえら、こんな大金を持ち歩く奴を誘拐しないでなんとかするか」住家に戻った五人は積み荷を確認して発狂せんばかりに喜んだが、

李会にそう言われて顔色を変えた。大手柄が一転して、命懸けで積み荷の主を見つけないけりばならなくなつたのだ。少し前に大京の軍に大敗し、多くの部下と片腕である弟を殺される痛手を被つた李会は、大量の財を前にしても機嫌が悪かつた。五人にとっては予期せぬ不運であつたと言えよう。

前後に挟み込もうと、五人は馬の速度をあげて孝傑らの前に出た。孝傑と苜乎に逃げる術は見当たらない。抵抗は虚しく、二人はあつという間に囲まれた。

「昨夜こそ泥の不運にあつたのはお前だな」

李会の問いに孝傑は無言で答える。

「本当の不運はこれからだ。馬から降りろ」

孝傑は苜乎を降ろして自分も馬から降りた。

「財は全て盗まれ、僅かな食しか持つてませんが、どうするおつもりか」

「あれが全財産でもねえだろ。家にはあの何倍も持つてんだろ」

孝傑は身代金目的に誘拐される事を理解した。

「あれだけの財だ。有名な商人に違いねえ。名乗れ。言わなければ先ずがきを殺る」

李会の声には凄みがある。孝傑が言う通りにしなければ、躊躇することなく苜乎を殺すであらう。

「奠の孝傑と申します」

「ほう、奠の孝傑だと。こりゃあ大物が網にかかつたわ。何万金稼げるのか楽しみだ」

李会は大声で笑い、残忍な顔付きで踵を返した。苜乎は恐ろしさで身体が震えた。これまでの人生で最大の恐怖と言えよう。

「孝傑は住家に連れ帰れ。がきはこの場で殺せ」

李会は去り際に部下に命令した。

此処で死ぬのか。苜乎は小さ過ぎる自分の存在に呆れ、泣いた。母に別れの挨拶が出来なかつた事を悔やんだ。

母上、親不孝な苜乎をお許し下さい。

賊の一人が懷から短刀を出して苜乎に近づいた。

「その子に手をかけてお金が入るとお思いか」

背中に両手を結ばれた孝傑が、李会に向かって言葉を投稿た。李会の足が止まった。振り向いた顔は鬼の形相で、

「俺に指図するんじゃねえ。てめえも殺すぞ」

と、怒声をあげた。孝傑も負けていない。

「私はまだ死にたくない。お金を貴方に与えなければ助からないから、その子を殺すなど言っている」

孝傑の気魂は決して李会のそれにも負けていない。むしろ気迫は孝傑の方が上であつた。李会はむつとしたが、これが豪商と呼ばれる男の胆力なのかと、孝傑の鬼のような気迫に押された。

「どうということだ」

「私が助かる方法は一つ。奠の家に身代金を支払ってもらうしかありません」

孝傑は、それにはこの少年が証人となり奠に帰る必要があると、声を大にして言った。少年を殺せば誘拐を裏付ける証拠に乏しくなり、店の者はお金を用意しないであろう。今回の運搬予定では奠に帰るのにまだ日にちがあり、今から出て奠の店に誘拐を伝えても、孝傑が帰る予定の期日を過ぎなければ誰も動かない、と孝傑は必死に力説した。

「身代金が届かなくては私は殺される。貴方が得をすることもありません。この少年を無事に奠の店に送り届けることが、貴方に巨万の富をもたらすことだと、お思いになりませんか」

「お前の持ち物が証拠になるだろうか」

「生きた証人なしで、誰が巨額の金をだしましょう」

李会小さく唸った後、

「がきを殺すな」

と、部下に命令した。それから少しの時間考えて、

「李空、お前ががきを奠まで連れて行け。奠で金十万を手に入れたら真つ直ぐ帰ってこい。いいな、寄り道するんじゃねえぞ。金十万

だ。一切まけるな。間違えるなよ」

と、李会は賊の中で一際美形な男を指して言った。命令された美形な男は、苴乎の元に歩み寄り、

「よろしくな」

と、爽やかな声で苴乎に話し掛けた。

李会率いる賊は孝傑を連れて住家に向かった。

「奠の店に着いたら、家宰の前に弥に相談しなさい」

去り際に孝傑は、心配顔で見送る苴乎に言った。孝傑の目はもっと多くの事を言いたそうであつたが、状況がそれを許さなかつた。

苴乎と李空をおいて出発した賊は、未練がましく苴乎に視線を送る孝傑とは反対に、誰も振り返ることなくさつさと馬を進めた。数十頭の馬の足跡と二人の人間が、広い大地にぼつりと残された。強い風に煽られた木々は、まるで苴乎が孝傑を呼び叫ぶのを代弁するかのように、大きな音をたてていた。苴乎は奥歯を噛み締め、そして涙を流した。

莫（一）

空は晴れであるが、地上には嵐のような強風が吹き荒れていた。朦朧とする意識の中で、きよか 苜乎は李空のりくう 歡喜の叫びを聞いていた。腫れ上がった右尻は既に痛みを感じない。

狂走する馬に俯せで縛られた苜乎に激しい鞭が飛ぶ。連続で三発鞭が入ると、苜乎は今日何度目かの白目を向いて気絶した。それでも苜乎の身体には、容赦ない鞭が打たれ続けた。狂ったように奇声を発しながら鞭を打つ李空には、馬だろうが苜乎だろうが関係ない。ただ力いっぱい鞭をしならせることが、この男の楽しみであったのだ。

無茶苦茶に鞭を振り下ろす李空の腕が止まった。舌打ちした李空は、鞭に反応しなくなった馬と苜乎を睨みつけ、おもいつきり手綱を引いた。馬はもんどりうって転倒した。李空は素早く馬から飛び去ると、疲労で活力を失っている馬の頭部に蹴りを食らわした。

「駄馬が…役に立たねえ…役に立たねえ…役に立たねえ」

苛々で頭を掻きむしる李空の目は正気ではない。腰の短刀を抜くと、奇声と共に馬の横つ腹に短刀を突き刺した。疲労で立つことも出来ずにもがき苦しんでいた馬が、小さく震えた後、力無く生き絶えた。「糞が、また殺っちまった」

李空はかすれた声でそう言うと、薄気味悪く笑った。馬を殺したのは後悔だが、それ以上に馬を殺した快感が、李空に至福の時を与えているのだ。

殺しの余韻にしばらく浸っていた李空は、はっと我に帰った。馬の尻に縛られているはずたばろの苜乎を、恐る恐る覗き込んだ。

「死んではないだろうな…お前に死なれたら俺は…俺は…帰れなくなるんだからな……」

情けない顔で、苜乎の首に手を当て脈を調べる。

安堵の表情を浮かべた李空は、苜乎の小さな頬を平手で打った。李

空は平手を打ち続けた。苺乎が目を覚ますまで止める気はない。五発、六発……李空の顔はにやけ、すっかり悦に入り、できればこの少年の目が覚めない事を祈るようになった。何発目だったろうか、苺乎は引き付けと共に意識を取り戻した。苺乎は激しく肩を揺らしながら、呼吸を整えた。

まだ生きている……。苺乎はまだ死んではない事を先ず認識した。この人は狂っている……正気ではない……。一見男の目は優しいが、奥に潜むのは残忍さである。苺乎は悪寒を感じて後退ろうとした。が、馬に縛られている身体は動ける筈がなかった。

「今縄を解いてやるから大人しくしてな」

そう言った李空の声や態度は優しい。それが苺乎の恐怖心を増大させた。身体が自由になった苺乎であるが、身体中の激しい痛みで、直ぐには動けなかった。

逃げなければ……。苺乎は痛みを堪えて逃げようとしたが、身体が言う事を聞かない。

逃げなければ……殺される……。苺乎の身体は恐怖の為に震えていた。李空がゆっくりと近付くと苺乎は小さく悲鳴をあげた。

「黙らないと、殺しちゃうよ。俺は人が恐怖に怯えているのを見ると、興奮して殺りたくなるから……」

黄ばんだ歯を見せながら李空が近付いてきた。両手が苺乎の首にかかる。声が出ない。涙がとめどなくが溢れ出る。

首にかかった震えた手に、ゆっくりと力が加わる。

死ぬ。苺乎は恐怖で抵抗することも出来ない。呼吸が苦しくなり、意識が遠退く。苺乎は最後の力を振り絞り、ありったけの声で叫んだ。

荒れ狂う風が一瞬止んだ。無風状態の空間を、一筋の矢が切り裂いた。矢は李空の右足首に突き刺さる。李空は苺乎の首から手をはなし、もんどりうった。倒れている馬の陰に這い進んだ李空は、馬を盾にして体制を立て直す。

「誰だ、畜生、出てきやがれ」

李空は怒鳴った。その怒鳴り声を掻き消すかのように、強風が再び辺りに吹き乱れた。森林は風を受け、がさがたと音を鳴らしている。李空の声に反応はない。李空は矢が飛んできた方角に目を走らせたが、颯爽と繁る木々が視界を遮っていて、狙撃者の姿を発見することが出来なかい。

「畜生が……」

舌打ちした李空は、自分に刺さっている矢をがむしゃらに引き抜いた。矢傷は浅く、致命傷ではなかった。浅い傷に、思ったより遠方から放たれたかもしれない、と考えて、この風では次に放たれる矢があたることはないと断定した。

風が止まなければ弓は使えまい。李空は上空を睨み、あの一瞬を無風状態にした天を憎んだ。

生死を分けた苺乎であったが、既に気を失っており、まだこの世にしがみついている自分に会えなかった。李空は荷物をまとめ、片手で苺乎を持ち上げると、この場から走って逃げ出した。追い風にのった李空は、人間離れた速度でこの場を離れる。抱えられた苺乎の目は、まだ閉じられたままであった。

怖い…怖いよ。嫌だ、嫌だ…嫌だ。懸命に走る苺乎であるが、どれだけ走っても結局は捕まえられて殺される事は分かっていた。だが、苺乎はがむしゃらに走った。とにかく怖くて怖くて堪らないのだ。

助けて…誰か助けて…怖いよ。鞭が苺乎の背中を激しく打つ。痛い。苺乎は前のめりに倒れ込んだ。立ち上がるうとした苺乎に、鞭が雨のように飛んできた。恐怖と激痛に苺乎は泣きわめいた。苺乎は目を覚ました。全身が汗でびしょびしょであった。呼吸が荒く、心臓が激しく波打っていた。体中が焼けるように熱くて痛い。夢からは覚めたが、悪夢はまだ終わっていないのかもしれない。

生きている…のか。暗闇の中、縄で縛られ動けず、激痛に耐える自分はいかにも現実的で、記憶が頭を駆け巡れば巡る程、苺乎の心の

中は恐怖で埋め尽くされる。

もう死のう。死ねば楽になれる。こんなに辛いなら母上もきつと許してくれる。うん、そうだ。そうしよう。死ねばいいんだ。簡単なことだ。自暴自棄になった苜乎の頭に、突然母の声が聞こえた。「人を助けることは素晴らしいことです」

苜乎が十歳の時である。

圭姫けいひが苜乎よたを連れて与太たいきょうへと外出した事があった。

与太は太たいきょうがある帯振たいしんの北にあり、夏奥山脈かおうも与太の地ちに含まれる。山間にある幾つかの邑まちの内うちで、もっとも大きな邑まちが楽刹らくせつである。楽刹には昇王朝じやうていの歴代の王の墓があり、その為圭姫は苜乎の父親でもある苜王の墓参りに出掛けたのである。

道の途中、圭姫の一行を山賊が襲った。が、山賊は五、六人の小さな集団であり、護衛だけで倍の人数をようする圭姫の一行によって、簡単に捕えられたのである。

捕えられた山賊の首領らしい男は大きな声で、

「貧乏で食えることも出来ず、一昨年産まれた子供は栄養不足の為に痩せ細り、もう長くは生きられない。牧畜で得た金の殆どは税金として納め、王は俺達に生きること奪うのか。贅沢を続ける王室から少しぐらい奪って何が悪い」

と、息巻いた。王朝の一行を襲い、さらに王朝に対しての批判である。通常ならば死刑の中でも最も重い刑が言い渡されるところであったが、車から降りてきた圭姫が、

「その者達を開放し、今ある財貨を全て差し出さない」

と、言ったことで、事態は思いがけない方向へと進んだのである。

「圭姫様、ご冗談を。折角捕らえた賊に財貨を渡して逃がすなど、出来る訳がございません」

護衛長が半ば笑いながら圭姫に言った。

「この顔が冗談を言っている顔に見えますか」

「しかし、それでは苜王にお供えする物が無くなりますぞ」

圭姫が真剣なのを理解した護衛長は、そう言つて圭姫に再考を促した。

「苜王には心を供えましょう」

圭姫は呆れる護衛長らにこれ以上話す事はない、というようにさつさと車に戻った。残された者達は仕方なく圭姫の言葉に従った。

自由を与えられ、豪華な土産まで持たされた山賊は、自分の頬をつねり夢でないことを確認して喜びに跳びはねた。有頂天の仲間をよそに山賊の首領らしき男は、圭姫の乗る車が見えなくなるまでずっと地面に両手をついて頭を下げていた。男の目からは、ぽたぽたと涙が落ちていた。

「母上、賊に何故あのようなことをしたんですか」

車の中で苜乎は聞いた。

「確かにあの者達の行為は許されない事です」

圭姫は少し間を空けて、

「ですが、一人ぐらい味方になってあげてもよいではありませんか。きつと天も許してくれるでしょう」

と、圭姫は優しく微笑んだ。

「あの者が言うように、王は国民を苦しめているのでしょうか」

「全ての人を幸せにすることは、なかなか出来ることはありません。いいですか苜乎、人を助けることは素晴らしいことです。貴方はこれから困っている多くの人を助けなさい。そうすれば多くの人が幸せになれるのです。人の幸せを自分の幸せと感じられる人間になりなさい」

苜乎は大きな声で返事して、母の胸に飛び込んだ。何故だか無性に甘えたくなったのだ。

母上……。苜乎は自分でも気がつかないうちに泣いていた。涙が止まらない。あの時と同じように母に甘えたかった。

母上……苜乎は、苜乎は……母上に会えたら、褒めてもらえるようになります。母上の言った通りにしたと、褒めてもらえるように頑張ります。

ます。

苒乎は肩で涙を拭いた。もう涙は流れていない。苒乎の中で何かが弾けた。それは苒乎の体内に、勇気が生まれた瞬間であったのかもしれない。

苒乎の顔付きが変わった。恐怖に怯える少年はもういない。いるのは使命感に燃える勇敢な少年である。

苒乎は五感を働かせた。

先ず、血の臭いを嗅ぎ取ると、次に、微かな物音を聞きとった。そして暗闇に慣れてきた視力が苒乎に多くの情報を与えてくれた。苒乎は寝室のような室内にいた。その中央付近に苒乎はいるが、部屋の出入口に二人の人間が重なるように横たわっていた。寝ているようには見えない。明らかに死んでいるようである。がさがさとまた物音がした。

同時に、部屋に誰かが入ってきた。暗くて顔が見えないが、李空以外に考えられない。苒乎は目を閉じたが、寝ている振りをするつもりはない。上体は起こしたままであり、相手はこちらが起きることに気がつくであろう。ここで自分自身に勝たなければ、一生弱い人間で終わる、と苒乎は決意を固めた。

気配で近付いてくるのが分かる。緊張で身体から汗が噴き出してきた。決して怖い訳ではない。苒乎の小さな心臓が波打つ毎に、苒乎は小さな勇気を積み重ねていた。

自分が死ねば孝傑殿こうけつが殺される。生きて必ず孝傑殿をお救いするのが自分の勤めであり、責任だ。苒乎は肚から声を出した。

「私に手を出す事は許さない」

声に気魄があった。闇の中、近づく男は動きを止めた。離れた場所から、

「まだ誰かいるのか」

と、李空の声がした。次の瞬間、闇の中の男は踵を返して部屋を出た。

「誰だ」

李空が叫んだ。男の逃げる足音を李空の足音が追う。苴乎は静寂の中に一人残された。

あの男ではなかったのか。苴乎はおかしくて笑いそうになった。最大の勇気で放った言葉は対象者を間違えたのだ。こんな状況下だからより滑稽に思えた。苴乎は肩の力を抜いた。自然体であると言つてよい。暫くして、炬火を持った李空が姿を見せた。怖い顔をしていたが、正気を失っている時の目ではない。

「おい、誰と話していた」

全速力で走った後なのか、ぜいぜいと李空の呼吸が荒い。

「あの尋常じゃねえ足の速さはここの住民とは思えねえ。あの矢を放った奴だな」

「先程の人とは話をしてません」

苴乎の声は落ち着いている。

「何者だ」

「存じ上げません」

「てめえ、なめてんのか」

李空が声をあげた。

「知らないものは答えられない」

苴乎の声は大きくて、口調には微塵の臆病さも感じられなかった。今までびくびくしていた少年の態度の変化に、李空は多少の戸惑いを見せた。

「さっきの奴に何を吹き込まれたかしれねえが、逃がしはしねえ。ちよつとでも変なそぶりしてみな、俺は容赦しねえぞ」

「逃げるなどとてもない。生きて孝傑様をお助けしなければなら
ないのですから」

時間が経つても苴乎が蓄えた勇気の大きさは変わらない。

「今後私に手を出さない事を約束して下さい。さもなければ……」

「さもなければ何だ」

「さもなければ、例えば生きて^{てい}まま奠に^{てい}着けても、貴方の言う通りには
しないということです。孝傑様は既にお亡くなりになったと伝えま

しょう。金は渡しません。私を殺したければ殺しなさい。そうすれば貴方は手ぶらで戻ることになりましたよ」

「生意氣ながきが……」

「私の命には、いえ、私の言葉には金十万の価値があります。これ以上私に酷い事をするならば、孝傑様のお命と自分の命を捨てましょう。きっと孝傑様も許してくれます」

苺乎の目を見れば、脅してないことは明らかであった。李空は少年とは思えぬ苺乎の凄みに、思わず後退りした。

「勝手にしな。だが、俺の役目の邪魔はするな。もう寝ろ。明日からは道を急ぐからな」

李空はそう言つて部屋を出た。

孝傑殿待つて下さい。苺乎は必ず助けに行きます。苺乎はすつと眠りに入った。体中の痛みは消えていないが、この時の苺乎にはさほど感じられなかった。

目を覚ますと、苺乎は馬車の荷台にいた。李空は荷台の前方で手綱を操っている。空は青々としていて、風もさほど強くない。春の暖かい風は苺乎の髪を優しく撫でる。昨日までの厳しい風はすっかりと様変わりしていた。

風が変わった。

苺乎は風の変化を自分に重ね合わせて、最悪の状況は脱したと、一人ほっとした。実際もそうだと考えた。李空はひたすら先を急ぎ、苺乎を構うことがほとんどなくなった。奇行に走ることもなく、苺乎や馬、宿屋の人々を手にかけることもなくなった。連れている少年が怯えることで、興奮していたということだろうか。

「奠の店に着いたら役目を果たせ」

李空が苺乎に話す事はこれ以外には食べると寝るぐらいで、饒舌であつたことが嘘のように李空は寡黙な男になっていた。

苺乎はある程度自由にされた。逃げられないように縄で縛られることもなく、移動中以外は自由に歩くことも出来た。

李空との四日目の昼ご飯を済ませた苺乎は、山の中で小川を見付けた。

「水を汲んできます」

李空に一声かけるが、返事はない。李空は苺乎に対して、駄目な事は駄目だと言い、してもいい事は何も言わない。返事のないのは許すということだ。苺乎は小道を下った。

小川の水は透き通っていて綺麗だった。苺乎は両手で水をすくって口にふくんだ。何とも言えない水の冷たさが、少年の小さな体に染み渡る。苺乎は口を直接小川につけて水を飲んだ。そして顔を水につけた。顔がひんやりし、水の流れに適度な刺激を受けて気持ちが良かった。

傷はまだ痛む。特に右足の付け根と背中への傷は深く、腫れも酷かった。苺乎は水で布を濡らして傷口を洗った。傷口がしみたが、苺乎は顔を歪めただけで声は出さなかった。苺乎が我慢強くなったのと、痛みには慣れたせいであろう。

苺乎は傷口を洗い終わると、背中をくねらせながら伸びた。

これぐらいの身体の痛みは何とかなる。本来ならば立っているのもやっとの傷である。鞭で打たれた痕は赤く爛れて腫れ上がっている。体中が火傷のように熱く炎症しているのだ。苺乎の気持ちは依然として強いということだ。

李空の所に戻ろうとした苺乎の背後で人影が動く。人の気配を感じた苺乎は辺りを見回した。

蝶が木から木へ、花から花へと踊るように飛んでいる。小鳥達は歌うように鳴き、あちらこちらを忙しそうに羽ばたいている。山を知らない苺乎にとって、動物や昆虫が暮らす長閑な風景はまさに至上の楽園であり、自分もこのような自然の中で生きてみたいと切に思うのであった。

確かに誰かがいたように感じたけど……。辺りに異常なしと判断し、一歩目を踏み出そうとしたまさにその時、苺乎は背後から口を押さえられ、あっという間に草村の中に引きずり込まれた。咄嗟のこと

で莚乎は抵抗出来なかった。

草村の中で莚乎は男と目を合わせた。

「ご安心して下さいませ。お味方でございます」

男は早口にそれだけ言つと、莚乎の体から手を放した。莚乎はあまりに唐突な事故、何も言えずに眉を寄せた。

「さあ、あの殺人鬼から逃げましょう。急いで私とお逃げ下さいませ」

莚乎が着いて来ることに何の疑いもなかったのだろう。男は戸惑う莚乎を見もせずに、莚乎の腕を掴むと走り出そうとした。

「待って下さい」

莚乎は慌てて掴まれた腕を引つ込めた。

「誰だか知りませんが、一緒には行けません」

振り返つた男は莚乎の言葉に驚いたようで、啞然とした顔で莚乎を見た。

「今何といわれましたか」

「一緒には行かないと言つたのです」

「何故です」

「ある人を助けなければならぬからです」

「ある人とは」

「莫の商人孝傑殿です」

男は暫くの間考え込み、

「莫へ向かっているのですね」

と、莚乎に聞いた。

「莫の孝傑殿のお店に行きます」

男は莚乎の両肩に手を置いて、

「お氣をつけ下さい。あの男は人を殺す事に快楽を感じているようです。もしもの時にはこれをお使い下さい」

と言つて、腰にさげた短刀を莚乎の足元に置いた。

「くれぐれも道中ご無事で。私も陰から見ておりますので」

男はそう言つて、背中を見せた。男の背中には見事な弓矢が背負わ

れていた。

「貴方は」

「昔乎が最後に、貴方は誰なのか、と聞くよりも早く、男の姿は草村の奥へと消えていった。」

奠（二）

夏元^{かげん}のこの時代、邑は城と同意語で使われていた。

邑とは、貴族や市民の暮らす町を城壁で囲んだものであり、戦争ではこの邑を取り合うことが基本になる。邑の中央には政治や軍事を行う宮殿があり、その周りを貴族や市民の住居が取り囲む。通りに出れば様々な店が立ち並び、邑民の生活を支えていた。また、邑の周辺には農民が暮らす集落が点在し、農業や家畜に精を出していた。邑は言わば国の最小単位であり、幾つもの邑を合わせた地域が州である。茗^{めい}や菟^と、那^なや帯振、与太等がそれに当たる。各州には諸侯と呼ばれる領主があり、彼らは昇王朝の天子に任命され、それぞれ独自に政治を行っていた。

奠は大京の乱の首謀者である雷樂^{らいらく}が治める茗の首都である。茗は夏元のほば中央に位置し、東西南北に走る大きな街道が奠で交差するなど、交通の要所とされていた。奠は人口が二十万人と夏元で最も大きな邑であり、商業が盛んな大都市であった。

苴乎の前方に巨大な城壁が見えた。大京の城壁も立派なものであったが、前方に見える城壁は更に高い。苴乎は孝傑から奠についての話をよく聞いており、高くそびえ立つ城壁を見て、奠に着いたことを知った。

李空は奠の手前で馬車を停めた。

「奠にはお前だけで行け」

と、荷台の苴乎を見ることがなく言った。奠に入る為には城門を通らなければならない。戦時以外城門は開かれているのが常であるが、往来者を監視する守衛兵が目光らせていた。手配書に載るぐらい賊の中でも名と顔を知られている李空は、当然監視の厳しい大きな邑には入れないのだ。

「三日間だ。それ以上は待たない。三回目の夜明けに俺はこの場所に来る。同じ時、金十万を用意して此处に来い。一乗の車では無理

だろうが、車の数は出来るだけ少なくしろ。金を運ぶ随伴者の数は車と同じだ。それから下手な真似はするなよ。ある程度経っても俺が戻らないようなら、兄貴は当然人質を殺すぞ」

李空は正面を見ながらそう言つと、苜乎を一瞥し、目で行くように促した。苜乎が馬車から降りると、李空は馬車を反転させた。

「間違えるなよ。今日から三回目の夜が明けた時だ。お前も必ず来い。金が十万に足りなければ、人質は死ぬと、店の者に伝える」

李空は手綱を動かした。馬車は苜乎を残し、燦々たる太陽の中を去つていく。苜乎は直ぐに馬車から奠に視線を移し、目的地に向かつて歩き始めた。燦々たる太陽が、正午をちょうど指していた。

夏元随一の商業都市である奠の賑わいは、初めてこの邑を訪れた人が、今日は年に一度の祭なのか、と勘違いする程に凄い。路の両側には隙間なく露店が並び、あちらこちらで客の呼び込み合戦が行われている。路は通行人でごった返しており、なかなか前に進めない。慣れない者が数歩進む度に、品物を買わされる光景も、此处では当たり前のように見受けられた。

奠では各地方から争うように物資が運び込まれ、夏元全土の特産物が店先に並ぶ。またそれが、人々の足をこの邑に向け、人と物とが絶え間無く流れ動く図式を形成するのであった。

此处での日常であるが、今日も城門では奠に入る為に人々が長蛇の列をつくっていた。城門で監視を行う守衛兵は、慣れた様子で一人ずつの身元と荷物とを調べ、段取りよく邑内に通していた。それでも夕刻までは列がなくなることはないのだから、いかに奠に人と物資が集まるかが分かるであろう。

邑内から一人の男が城門の様子を窺っていた。歳は二十代前半であろうか。きりつとした眉に細い目で、顔全体はうすい印象である。服装は商人の物で、細い体によく似合っていた。

あっ、と言うのと同時に、男は城門へと走った。守衛兵を押し退けて、城門で質問にどう答えようかと考えている少年を、いきなり抱きしめた。

「よくぞ帰ってきた。もう安心していいぞ。後はこの兄に任せなさい」

男は少年を抱きしめたままそう言うのと、

「すいません。帰りが遅くて心配で、弟の姿を見た途端つい足が勝手に動いてしまいました」

と、守衛兵の方を向いて言い訳をした。守衛兵は自分達が突き飛ばされた事も忘れて、兄弟の再会に微笑んだ。

「孝傑の店で働いております弥やと申します。これは私の弟でございます。弟を連れて行ってもいいでしょうか」

「孝傑殿の店の者なら安心だ。行きなさい」

「さあ、行こう」

弥は少年の手を掴み、邑内の雑踏に消えていった。

自宅に戻った弥は、苜乎を室内の北側に座らせ、自身は南側に両膝を合わせて座り、頭を低くした。主従関係において北側に座るのが主であり、南側が従である。子供ではあるが、王室育ちの苜乎にはこの意味が分かる。弥が苜乎の名前だけでなく、苜乎が王族ということも知っているということだ。

「苜乎様、数々のご無礼をお許し下さい」

弥は更に頭を下げ、額を床につけた。

「無礼など……。先ず頭を上げてください」

弥はゆっくりと頭を上げたが、まだ頭の位置は低い。

「貴方が弥だったんですね。孝傑殿から、奠の店に着いたら、家宰の前に貴方に相談するように言われました。貴方と会うのは今日で二回目ですが、どこまでをお話すればよいのでしょうか」

「お会いしたのは、正確には今日で三回目でございます」

そう聞いて、苜乎の頭にあの夜のことが浮かんだ。

「そうでございます。暗闇の中、農家で縛られていた苜乎様をお救いしようと近づきました」

苜乎に言うつもりはないが、殺しの快感に狂騒した李空が苜乎の首を絞めた時、神業とも言える弓の遠射で李空の足を貫いたのも弥で

あつた。

「最初、あの者は行く先々で何の罪もない人達を殺していました。私は菅平様をお救いする機会をずっと窺っていたのです。ところが、あの小川でやつとその機会がきましたが、菅平様に断られてしまいました。私は推測しました。もしや旦那様があの男の仲間にさらわれて、店の者だと思われている菅平様が、その証人とされたのではないかと。だから奠に向かつているのではないかと。菅平様、ご面倒かもしれませんが、大京を出られた時の事から全て、弥にお話し下さいませ」

菅平は、圭姫を置いて孝傑と二人で大京を脱出した事、多額の財を積んだ車が盗まれた事、農家で食糧を分けてもらった事、賊に捕まった事、李空との旅の事を、時には詰まり、時には話が前後したりしながらも、弥の助けを受けて一生懸命話した。

菅平から知りたい事を概ね聞き出した弥は、難しい顔で押し黙った。「貴方はいつから私の近くにいたのでしょうか」

菅平にも聞きたい事はあつた。弥については何も知らないのである。「私のこともお話しなければなりませんね」

と、弥は表情を緩めた。

弥は普通の人が徒歩で三日かかるところを一日で行く。早く情報を入手したければ、脚の速い者を情報員として雇う。これはこの時代の常識であつた。類い稀な脚を持つ弥は、孝傑の店で貴重な情報員として働いていた。また、弓術を始め様々な武術にも優れていたのだ、孝傑が邑間を移動する際には、必ず弥は護衛として同伴することになっていた。

孝傑が雷樂の拳兵を知った時、弥は奠から東へ五キロ離れた地で別件での情報を集めていた。予想していたより雷樂の拳兵が早いことに慌てた孝傑は、出発の準備を急ぎながら、弥に手紙を出した。

「旦那様は、私を待たずに一人で大京に向かうとのことでした」

手紙を受け取った弥は、直ぐに孝傑の後を追った。孝傑は弥の脚を計算し、予め落ち合う場所をも手紙に記していた。

「手紙には、旦那様がどの道を通るかも記されておりました。予定では、旦那様らが大京を脱出した日には合流出来る筈だったんです。ですが、途中大雨で河が氾濫し、私は足止めを余儀なくされました」弥は東方から、孝傑らを猛烈な速度で追ったのであるが、遂に会う事が出来ず、大京と奠の間を一日さ迷ったのだ。

「見覚えのある服を着た少年が、目付きの悪い男と行動を共にしているのを見て、もしやと思い、後をつけたのでございます」

弥は菅乎の顔を知らなかったが、少年の顔を見て直ぐに菅乎だと決め込んだ。少年の顔は気品に溢れ、どう見ても商人には見えなかったからだ。だがそれは同時に、何かの不幸が孝傑を襲ったことを暗示しており、弥は張り裂けそうな胸の痛みに耐えながら、菅乎救出を決意したのである。

「菅乎様、状況は余り良くございません」

弥は自分の知っている事を一通り話すと、最後にそう付け加えた。

「金十万を、三回目の夜明けまでに持って行かなければ、孝傑殿をお救いすることが出来ません。金十万とは、そんな大金なのでしょうか」

「三日の内で用意するには、大変な大金でございます。ですが問題は別なところにもございます。仮に金十万を用意したとしても、果たして無事に旦那様を返してもらえるかどうか。相手はあの李兄弟でございます。最悪、相手の家に金を届けた瞬間に、金を運んだ者達は皆殺しにされるかもしれません。そして、何食わぬ顔で、新たな大金を要求してくる事も考えられます」

そこまで酷いことは、しないのではないか。宮殿内で温厚に育てられた菅乎には、弥の言っている事が半分理解出来ない。

「多少の駆け引きは必要でございましょうが、とにかく金を用意してから考えることに致しましょう」

金については、店の責任者である家宰の燈県とうけんに相談するのが早道であり、二人は先ず店に向かうことに決めた。

「旦那様は今回の件、燈県殿には何も告げておりません。言えば必

ず反対されると仰せになり、私にしか話されませんでした」

と、弥の話は続いた。

「燈臺殿は信頼できますが、旦那様が戻るまでは、苜乎様のことは一応秘密にしておいた方が良いでしょう」

奠は王朝に引導を渡そうとする雷樂の本拠地である。

そんな邑の一商人が、その滅亡の淵にいる王族を匿うなど、誰が聞いても馬鹿げた話であろう。

店の責任を一手に背負う家宰ともなれば、そんな危険な事には反対せざるを得ない。孝傑は誰にも相談せずに今回の行動を決めたのである。孝傑はどんなに危険であろうが、圭姫への気持ちが一番に考えたのだ。孝傑はその唯一の協力者として弥を選んだのである。弥の非凡な能力は勿論であるが、信頼できる人間性をも見て決めたに違いなかった。

「苜乎様、恐れ多いことですが、暫くは私の弟ということにして下さいませ」

額をまた床につけて恐縮する弥に、苜乎は席を立て近づき、弥の両手をとって頭を低くした。

「今から私は貴方を兄とします。何も遠慮することはありません。私に出来る事があれば何でも言っして下さい。孝傑殿をお助けする為、これから共に頑張りましょう」

弥もまた世間同様に、王朝に対して悪い印象を持っていた。

王朝に席を置く苜乎に対しても、我が儘で傲慢な少年を勝手に想像していたのだ。

だが、眼前で頭を下げる少年は謙虚で優しく、天と地程の身分の差があるにも関わらず、自分に余計な気を遣っているのだ。

なんという子であるか。弥は苜乎の奠迄の道則が、決して楽なものではなかったことを知っていたし、李空に痛め付けられた全身が、直ぐに治るような浅い傷ではないことも知っていた。何より、小さな少年には過ぎる苦難にあいながら、更なる困難に立ち向かって行く姿勢に、弥は目を見開いて驚いたのである。

「お心づかいありがとうございます。苺乎様、やはり先に医者の所へ行きましょう。お体が心配でございますので」

「体のことは心配ありません。少し痛い所もありますが……。それよりも、時間はどれだけあっても余ることはないでしょう。急いで家宰の下に参りましょう」

苺乎は元気な声を出した。実際には、李空から受けた傷と旅の疲労が重なって、今にも倒れそうな状態であった。

頑張らなければ……。肉体的な限界に達している筈の苺乎を動かすのは、衰えを知らない気力であろう。孝傑を助けたいという強い気持ち、苺乎の気力を支えているのだ。

「分かりました。とにかく燈臺殿に会いましょう」

出来るだけ苺乎の気持を尊重したくなった苺乎は、一先ず医者の所に行く事を諦めた。

「名はどういたしましょう。本名では命取りでございます。何か適当な名でお呼びすることになりますか……」

何でも構わないと言う苺乎に、

「それでは、苺乎に致しましょう。私の字を入れた方が、呼び名としては自然ですので」

「苺乎ですか。良い名です」

これより苺乎は、実に十五年もの長きに渡り、この名を使うことになる。

「今からは苺乎か……」

考え深げに佇む苺乎も、この時消された苺乎と言う自分の名が、後に夏元全土を巻き込む大乱を引き起こそうなど、考えようもないのであった。

苺乎の家で簡単な昼ご飯を終えた二人は、喧騒な通りへと出て行った。向かう先は、邑の中心でもある中央の大通りにある孝傑の店である。足速に歩を進める苺と苺乎は、距離をとりながら自分達を尾行する影に、全く気が付かなかった。二人が孝傑の店に入って行ったのを

見届けた尾行者は、満足した様子でにやりとし、直ぐにこの場から走り去った。芭乎の周りでは、まだ暗雲が漂っている。これから成人するまでを奠で暮らすことになる芭乎であるが、最初の三日間は奠での最も辛い時間になるのであった。

奠（三）

二ヶ月前に六十歳を迎えた燈県は、白髪だが眉が黒々としており、いかにも頑固そうな大男である。孝傑とは実に二十五年の付き合いであり、孝傑が最も信頼し頼りにしている一人であった。店で孝傑に直接意見を述べれるのは彼だけであり、独断で物事を運ぶ権利も与えられている。各地にある店の状況を把握し、実質的に店を運営をするのは、家宰である燈県の仕事であった。

通された部屋で待つ弥と昔乎の前に、不機嫌そうな燈県が現れた。「お待たせ致した。弥よ、お前には聞きたい事が山程あるが、先ずその子供は何だ」

燈県の一瞥は昔乎をいきなり威圧した。着席した燈県を、昔乎は真っ直ぐに見ることが出来なかった。

「燈県様、弟の弥乎でございます」

燈県の片眉が上がった。表情はいかにも訝しかしい。だが燈県は、昔乎についてはそれ程重要ではないと言わんばかりに、直ぐに視線を弥に戻した。

「^{でん}弥で^{がきよう}賀矯の情報を集めている筈のお前が帰ってきたのには、やはり旦那様と関係があるのか」

弥は奠より東に位置する邑であり、賀矯とは孝傑と同じように奠に本店を置き、広範囲の商圈を持つ豪商のことである。

静かに頷く弥に、

「また旦那様の悪い癖が出たのだろうか、今回はちと様子が違っておる。目的や行き先を告げずに行かれるのはいつもの事だが、あれ程の大金を持つてとなると、そうはあることではない。しかも頼みのお前が旦那様から離れて戻ってきたとなると、したくもない想像をせねばならん」

と、燈県は腹立たしく言った。燈県は孝傑が秘事を自分ではなく弥に聞かせることに少なからず不満を持っていた。何かあれば真っ先

に自分に相談するのが当然であろうと、孝傑が単独で物事に当たる度に、その不快感を隠さなかった。

どうせ何かあれば、尻を拭くのは自分に決まっている。今まで孝傑が単独でした事で失敗はなく、したがって燈県が孝傑の後始末をしたことはなかったが、燈県にはその気持ちが強かった。

「茗を出発した兵が何処を攻めたか知っておるか」

「大京でございます」

「旦那様は大京にいるのではないだろうか」

燈県は眉間に皺を寄せた。

「旦那様は大京にはいらっしやいません。ですが大京に向かったのは事実でございます」

予想が半分的中した燈県は、溜息と共に、

「お前は一緒に大京に行ったのか」

と、吐き出すように言った。

「私は一緒には行っておりませんが、替わりに弟がお供しました」

前以て苜乎と打ち合わせた通りに、弥は話を続けた。

「旦那様の目的は分かりません。急に大京に行くと言せになり、私が奠に戻る迄待てないとのこと、弟を替わりに連れて行ったらしいのです。どうして弟を供に選んだのかは分かりませんが、多分誰でも良かったんだと思います。ただ供が必要だっただけでございましょう。弟が言うには、大京に向かう途中で、賊に襲われたということです」

「賊だと」

「はい、京南で賊に襲われたそうです」

燈県は腕組みし、

「まさか李兄弟ではないだろうか」

と、不安を声に乗せた。

「賊は李兄弟でございます。旦那様はさらわれ、弟は李空に連れられて此処まで来ました。賊は旦那様と引き替えに金十万を要求しています」

燈県は絶句した。孝傑が誘拐されたことでも驚愕なのに、さらに法外な要求額である。鈍器で頭を二度殴られたようなものである。

「金十万だと。いつまでにだ」

「今日から三回目の夜明けが期限でございます」

「馬鹿な……。そんな大金を集められる訳がない」

燈県は右手の爪を噛み始めた。考えに没頭している時にする彼の癖である。弥が燈県のこの姿を見るのは三回目であるが、何度見ても気持ちの良いものではなかった。苜乎は心此処に有らずという顔で、やや俯いていた。焦点の合わせぬ苜乎の視線の先には、大京にいる母の姿があつたのだ。

母上……。本当にご無事であろうか。必ず苜乎は母上の元に参加します。どうかご無事で。苜乎は遠く離れた母の安否を心配し、弥や燈県に大京の様子を聞きたい衝動にかられたが、すんでのところで思い留まつた。

我にかえつた苜乎の耳に、燈県と弥の会話が入ってきた。

「幾つかの取引先に頭を下げて回つても、とても足りぬ。主立つた大夫の方々も大京への軍に参加しておる。残っているのは、夏孝担かこうたんに乾豚かんとん、苓紀子れいきしぐらいか。これらもあたってはみるが、それでも金十万に足りるかどうか……。とにかくやれることは何でもしよう」

「旦那様の命がかかっております。どんなことをしても集めましょう」

燈県は慌ただしく部屋を出て行つた。残されたのは弥と苜乎の二人だけである。弥は大きく深呼吸した。

「さあ、燈県殿の言うように、私達は明日の朝迄休みましょう」

苜乎は促されるままに、店の中にある客室に移動した。

今日は弥と此処で休むことになった苜乎であるが、隣で寝かかつている弥のようにはいきそうもなかった。

「今から寝ろと言われても、まだ陽が高い。とても寝れません」

「寝れないまでも、少しお休みになった方が良いでしょう。明日は早起きして、私達も金を工面しなければなりませんから」

苜乎は横になつたが、気が乱れて落ち着かない。横になつたまま迷いに迷つた苜乎は、

「大京の事……母上の事で何か知っていませんか」

と、言えなかつた言葉を遂に言つた。もし母に何かあればと思うと、苜乎はなかなか言い出せなかつたのである。

弥が答える前から苜乎の顔は青白い。弥ははつとして、なぜ今までその事に気付いてやれなかつたのか、と、自分を責めた。

「大京は茗軍に占拠されました。詳しい情報はこれからになるでしょう。圭姫様については何も……」

相変わらず固い表情の苜乎であるが、

「ありがとうございます。また新しい情報が入れば教えて下さい」と、苦しい胸の内を外には出さなかつた。

苜乎は健やかな寢息をたてる弥の隣で、いつの間にか眠りに落ちた。疲れが溜まつていないはずはない二人である。翌日に燈梟の使いに起こされるまで、二人は一回も目を覚ますことはなかつた。

大京の乱から十日が過ぎようとしていた。大京から発した情報は大地を駆け巡り、各地で諸侯らの手に渡つた。まさに時代のうねりへと突入する瞬間であつた。様々な思惑にまみれながら、夏元は昇王朝時代から戦国時代へと移り変わるのである。

部屋に入ると既に燈梟が着席していた。苜乎は燈梟の顔を見て、状況が芳しくないことを悟つた。

「昨日あれから主だつた取引先を回つたが、集まつたのは金四万だけだ。日頃の恩を忘れた酷い奴らだと言いたところだが、いつもの奠に戦火が及ぶかもしれない現況で、よくこれだけ出してくれたものだと言いたい」

「全部でいくらになりましたか。店にある分とではまだまだ足りませんか」

「店にある分だと。馬鹿な事を言うな。此処には最低必要な運営資

金しかありません。余剰金は旦那様が全て持ち出して、今頃は賊の枕にでもなっているだろうよ」

燈県は鼻息荒く続ける。

「今で金五万だ。店の者達に協力を頼んで得た分を加算した」

店の者達と言ったが、燈県は自分の財産を売る等、個人的に一人で金七千を孝傑の為に用意したのである。その事をおくびにも出さないところは、この男の人柄である。

「後は返事を保留にしている取引先と、ある程度の資金力がある大夫の方々だが……。大夫の方々には今日会ってもらえるよう頼んでいる。私が一人で行くより、お前達と一緒に連れていった方が同情を誘えるだろうから、今日は私と行動を共にしてもらおうぞ」

燈県は青痣のある苜乎の顔に視線を移し、

「これから直ぐに出るぞ。急ぎ支度をしなさい」

と、胆力ある声で言った。燈県が自分の右拳で左掌を撃つて気合いを入れると、弥と苜乎は素早く立ち上がった。

夏孝担は老いた身体をゆっくりと動かしながら、その丸い体軀を燈県達よりも一段高い敷居の上へと移動させ、気だるそうな表情をあらさまに腰を降ろした。顔の皮膚は皺だらけで、だぶついた脂肪が見えていて気持ちが悪い。夏孝担の許しを受けて面をあげた苜乎は、孝傑との道中に見た蛞蝓を思い出した。

弥は強欲で知られる夏孝担が、金を貸してくれるとはとても思えなかった。それでも僅かな可能性を考えて頭を下げる燈県の決意と行動力に、弥は複雑な思いでいた。

可能性が低くても、出来る事は全てするということが。

無駄を嫌い、常に効率的に行動する弥には、燈県が此処に來た事が理解しがたい。

しかしその一方で、自分には本当に旦那様を助ける気があるのだろうか、自分に疑問を投げ掛けていた。燈県の後ろで、彼の背中を見ながら、弥はやはり自分は家宰のような大きな仕事は出来ない、

と心に描いた将来の姿を否定した。自分にはやはり使い走りしか出来ないということか。いずれ自分が大軍の指揮を任される將軍になるなど、今の弥には想像すら出来なかったに違いない。

「話は分かったが、今回は力にはなれない。おひきとり願おうか」
切実に頼み込む燈県に、夏孝担は淡泊な態度で接した。

聞くつもりのない話を、なぜ聞こうとしたのか。一生懸命に話をしている人間に対して、なんという態度であるか。苜乎は大きな欠伸をする夏孝担を不愉快に思った。苜乎には、初めから夏孝担が燈県の話に耳を傾けるつもりなどなかったとしか思えなかったのだ。

「もう終わりだ。約束通り話は聞いた。例の物を置いて、とつと帰ってもらおうか」

食い下がる燈県を群がる蠅でも追い払うように、夏孝担は苛々しげに退けた。

燈県は無表情で持参した小包を夏孝担の配下に渡し、足速に屋敷を出た。燈県は次の目的地まで、一言も喋らなかった。弥と苜乎も同じ様に、喧騒な通りを無言のまま歩くのであった。

乾豚の自宅の前で、弥は、

「先程の包みは何でございますか」と、燈県に聞いた。

「大夏鏡だ」

燈県の答に弥は目を丸くした。大夏鏡と言えば、最上級の宝品であり、人から欲しいと大金を積まれても、金だけでは決して譲らない代物である。

「なぜそのような物を……」

「旦那様の命が何よりも最優先だ」

「しかし……夏孝担は初めから金など貸す気はなかったのですよ」

「結果がどうあれ、話を聞いてもらわなければ始まらない」

もうこの話をするな、と言う燈県に、弥は納得がいかない。

大夏鏡だぞ。分かっているのか。少なく見積もっても金二万にはな

る。金二万をどぶに捨てたようなものではないか。以前から燈梟の裁量に疑問を感じていた弥は、呆れるよりも、この非常事態に何たることか、と頭の血を沸々と沸き立たせた。

不満が爆発しそうな弥に氣をとめるそぶりもなく、燈梟は乾豚の屋敷の中へと足を踏み入れた。

「夏孝担殿が会ってやってくれとのことだが、いかな用か」

三人が通されたのは、さほど広くない一室であつた。乾豚の歳は夏孝担と同じぐらいか。痩せ型で、体格とは不釣り合いな立派な顎髭をはやしている男で、夏孝担のような傲慢な所は見えないが、目は陰気であり、あざとさを含んだ様相であつた。

「実は、私どもに金を貸して頂きたく参りました」

燈梟は事情を伝えたが、金を借りたいと聞いた乾豚は、あからさまに嫌な顔をした。

「金はない。さつさと帰ってもらおう。夏孝担殿も酷い事をするわい。何か良い話だと聞いておつたのに……とんだ無駄な時間を」

「詳しくお話を聞いて下さい」

乾豚の言葉を遮って、弥の鋭く尖つた声が室内を駆け巡る。

「旦那様を無事救出できましたら、きちんと相応の御礼を致します。勿論どちらにしましても借りた金には利息をおつけしてお返し致します。それ程悪い話しいとは思いません」

「たかが商人のくせに黙れ黙れ。良い話かはわしが決める」

乾豚はそう言つて席を立つた。

「もう話は終わりじゃ。お引き取り願おうか」

「燈梟殿、こんなことをしていても、旦那様をお救い出来ませんぞ」
追い出されるように乾豚の屋敷を出た弥は、不満を燈梟にぶつけた。燈梟は弥の声が聞こえていないかの様に、

「次は苓紀子だが、残っている大夫では最後だ。次が駄目なら別の方法を考えねばならん」

と、誰に言つ訳でもなく重々しく言つた。

実は昨日燈県は、奠に残っている大夫の中で一番財力のある夏孝担を訪れていた。大夏鏡を買える程の金を出せるのは、奠には夏孝担と商売敵である賀矯しかない。賀矯とは犬猿の仲であり、とても話を持つてはいけないのが現状であった。燈県は夏孝担に大夏鏡を金二万で譲る旨伝えたが、強欲な人間独特の勘とも言うべきか、夏孝担は、

「何かお困り事でもおありか。今は大夏鏡に大金を出す気にはなれんのだ。お困りなら話を聞いてやっても良いが、何も無しではのう。そうじゃ、大夏鏡をただで譲ってくれるなら、話を聞いてやるどころか、乾豚や苓紀子にも口を利いてやろうではないか」と言つて、強欲で傲慢な顔をにやにやさせた。

「断るのは構わんが、この奠では誰の協力も得られなくなるぞ」次に夏孝担は語気を強めてそう言つた。

燈県には抗う事が出来なかつた。孝傑と縁のある大夫の方々は皆大京への軍に参加しており、奠に残る大夫に対し、夏孝担は大きな影響力を持っているからである。燈県は理不尽に腹を煮えたぎらせながら、大夏鏡を差し出す事を決めたのだ。

大夏鏡も金にならねば何の意味もないわい。燈県はそう自分を納得させるしかなかったのである。

さあ行くぞ、と言つ燈県に、弥はついに怒りを爆発させた。

「大夏鏡を返してもらいましょう。あんな形で差し上げるような物ではありません。売つて金にすれば二万にはなりましょう。はつきり言つて、燈県殿のやり方では金十萬は作れませんぞ。先程の乾豚様に対しても、もっと食い下がるべきでございましょう。夏孝担様も同様ですが、向こうは実際に金を貸しても損などないのですから燈県殿がもつと」

「それ以上は言つな。喧嘩をしている時ではない」

夏孝担にしても乾豚にしても、孝傑が無事に帰るなど考える筈はなかった。相手はあの李兄弟である。金をむしり取られて終わるに違いない、金を貸すなどありえない話なのである。

さらにこの二人について言えば、国を思う気持ちなどなく、自分の財を増やす事しか頭にない連中であつた。今回の大京への出兵に關しても、他の大夫が国の平和を願う気持ちや己の立身出世の為に立ち上がったのに対し、この二人は病氣や財政難と称して自兵を出さないばかりか、他の大夫から金を借り集め、あわよくば茗軍が負けて皆死んでくれれば良いとさえ考えているのである。

燈梟にもこの二人が金を貸さない事は分かつていた。が、それでも出来る事はしなければならぬ。例え大損や無駄に終わつてもだ。燈梟は弥以上に苛立つてもおかしくない自分を、懸命に押さえ込んでいたのである。

大通りに出て、苓紀子の屋敷に向かう途中、三人はいきなり数十人の男に囲まれた。苺乎があつと声を出す間もないぐらゐに突然の事であつた。男達の服装は邑を警護する役人のものである。男達の中で命令を出す男は、奠の司寇^{しこう}則ち警察長官である苓紀子であつた。「これはどういうことでございましょう。今から司寇様をお尋ねする予定でもございましたが」

燈梟の声はうるたえていた。とても迎えに来たとは思えない。明らかにこちらを捕らえようとしているからだ。

「その子供を捕らえよ」

苓紀子の声は冷え冷えしており、犯罪者に対する声と目であつた。

「後の二人はついてきても構わんが、邪魔をすれば容赦はせんぞ」

苓紀子の眼光に、苺乎を連れて逃げようとした弥も動けなかつた。

苺乎は縛られ、役人の一人の肩に担がれた。苺乎は何が起きているのか意味が分からず、無抵抗になすがままであつた。

「その子が何かしたのでしょうか」

困惑気味の燈梟が聞いた。苓紀子はむつと顔を歪め、

「賊の仲間だ。お前達は素性がはっきりしている故、捕まえばしないが、事情がはっきりするまでは奠から出ることは許さん」と、言つた。

燈県と弥の視線が、苓紀子の後ろで隠れている男を捕らえた。
賀矯。燈県と弥は心の中で同時に呟いた。

奠（四）

大商業都市である奠の内側では、星の数程いる商人達が、終わりの見えない仁義なき戦いを毎日切磋琢磨しながら繰り広げていた。安いと思つた物をさらに値切つて買い、次の日には素知らぬ顔でそれを買値の三倍で売る。今日は店じまいで安売りと宣伝している店がいつこうに閉店しない。今日は特別な安売りだと、毎日うたっている店がある。こんなことを繰り返しながら、奠の賑わいは夏元一と言われるまでになったのである。

商売を始めようとする者は、どこに住んでいようが、いつかは奠に自分の店を出したいと夢見るものである。奠は言わば商人にとつての聖地であり、奠で成功することは、商人の中の商人になるということであつた。

そんな奠において、一代で莫大な財を築き、確固たる地位に昇りつめた二人の豪商がいた。奠で商売をする者達の生きた教本とも言ふべき二人の男は、その商売のやり方の違いから、龍と虎と呼ばれ、

「奠に龍虎あり」

と、夏元各地の商人からも一目置かれる存在であつた。

奠で龍の異名を持つ孝傑は、まさに善の人である。

その商売は誠実で、決して約束を破らない事で有名であつた。また、根本的に弱い者の味方であり、いくつかの慈善事業も手掛けていた。何よりも人と人との繋がりを重視する経営方針は、他が安いからといって取引先を替えるような利益至上主義の世界では異質であり、直接的な利益を生み出さないやり方には反対意見も多かった。

例えば、金融分野においての孝傑の考え方は、他が決して真似をしないものである。

孝傑は金を貸しても利息を取らず、返済期限も特に設けなかったのだ。この手法は、金を貸すのは利息を得たいからという本来の目的にはそぐわず、さらに、返済期限がない為に計画的な運用も出来ず、

さもすれば借りた金を返済しない者まで出てくるように思えた。一見悪い所しかないように思えるこの手法だが、孝傑はこう言って周りを驚かせた。

「金に困っている人を助けて何が悪い。私が貸した金で、その人が助けられるなら嬉しい事ではないか。そうやって助けられた人々は、いつか私の店で何かを買ってくれよう。また、その人々は孝傑の名をあちこちで触れ回ってくれるであろう。どうせ同じ物を買うなら、孝傑から買ってやってくれと」

つまり孝傑は、貸した金が宣伝費になると言うのである。しかも大変効果的であると。孝傑はこうも言った。

「中には返せなくなる人もいよう。だが、それは利息や返済期限がある時に比べれば僅かである」

孝傑は返済出来なくなる理由は、利息と返済期限があるからだと言うのである。それら二つがある為に、人は返済を断念すると言う。

孝傑は燈県などの主立った従業員から猛烈な反対を受けた。が、結局押し切った。結果、財よりももっと大事な、一生離れない客を掴んだのである。

「今、火事で全財産を無くしたとしても、それ程の痛手とは思わない。なぜなら我々には支えてくれる多くの人々がついており、いつでも再生出来るからである」

孝傑に助けられた人々は、天の助けだと思い、いつしか天の使者である龍と重ね合わせたのである。

一方の賀矯はまさに悪の人である。

孝傑とは正反対な商売手法の為、龍と対する虎、しかも人食い虎と呼ばれるようになったのである。無慈悲、外道、脅しや騙し、あらゆる手を使い、貪欲に競争相手や他の商人らを飲み干していく様は、まさに虎であろう。そうして得た販売網は巨大であり、結局は他店にない品揃えと価格とを実現しているのであった。

「手に入らないではない。手に入れる」

「売れないではない。なんとしても売れ」

「こちらの値では売れないだ。夜半に火をつけると脅せ」

「この賀矯に逆らう奴は、容赦するな」

賀矯は厳しく言い放つ。徹底した利己主義がそこにはあるからだ。孝傑の客の中心が比較的貧しい庶民や農民に対し、賀矯の客は貴族を中心とした富裕層であった。しかしいくら客層が異なると言っても、ばったりと同じ席に着く事もある。その場合、犬猿の仲である当の二人だけでなく、互いの店の者達までが、激しくやり合うのであった。

賀矯の顔は一言で言えばのっぺらぼうである。目鼻立ちに印象があまりなく、中肉中背で、一回会っただけではまず記憶されないであろう容姿をしていた。しかし反対に、彼の声には特徴があり、一度でも彼の声を聞いたことがあるならば、決して忘れないであろう。

「私の店の者が、奠の近辺でその子供とあの李兄弟が一緒にいるのを見ております」

初老の男とは思えぬ女性のような甲高い声である。容姿を見ずに声だけを聞いた者は、賀矯の性別がどちらであるのか悩むであろう。口調は完全に男のものであるが、それを否定させるぐらい声質は女性的であったからだ。

「私の調べた限りでは、あの孝傑は京南の大賊である李兄弟と取引があるのです。いえ、はっきりと申し上げれば、李兄弟の後ろで彼らを操っているのが孝傑なのです」

近くで賀矯に耳を向ける苓紀子の表情は冴えない。

「私めの店の者も、何度か李兄弟に襲われたことがございますが、今から思えばそれらは孝傑の指示に違いありません。奴、奴めは、あるうことか、他の商人を賊に襲わせ、盗んだ物売って、利益をあげているのです。許されるべきでは、ございません。即刻孝傑を、捕えるべきでございます」

途中から賀矯の声は感情的になっていた。目は憎悪でできているかのように底暗い光を放っている。苓紀子はまるでそんな賀矯の視線を

避けるように、必要もないのに室内を行ったり来たりしていた。

馬鹿な事を言うわい。

内心では賀矯を快く思っていない。苓紀子はどちらかというと孝傑よりであった。ただ、仕事柄どちらとも仲良くしなくてはならなかった。孝傑には主に情報面で世話になっており、賀矯には沢山の有力貴族がついている。二人の実力者は奠において既に商人という枠を乗り越え、司寇である苓紀子をも凌ぐ力を持っているのであった。「司寇様、聞いておられますか。曖昧な対応ではなりませんぞ。あの少年を拷問にかけて、李兄弟と孝傑の隠れ家を吐かすのです」

「まあ、待たれよ。まだ小さな子供ではないか。拷問などせんでもよい。二、三日此処で過ごさせれば、自分から話し始めるだろう」

苴乎は奠内にある監獄に収容された。

「服を脱げ」

看守が威圧的な口調で言う。苴乎は言われた通りに服を脱ぐと、看守はいきなり苴乎を投げ倒し、首を掴んで無抵抗な少年を荒々しく押さえ込んだ。呻き声が苴乎の口から漏れた。

「どうした」

後ろで控えていた別の看守が寄ってきた。

「この餓鬼、懷に短刀を隠し持っていやがった。もう少しでやられるところだったぜ」

息荒く短刀を奪うと、看守は目に怒りを浮かべた。横たわる苴乎の小さな体が二度宙を飛ぶ。看守の強烈な蹴りが苴乎の腹部に食い込み、小さな体を床から押し上げたのである。

短刀は苴乎が李空と奠に向かっていている最中に、弥が護身用にと苴乎に渡した物であった。奠に着いた後も、

「危険はまだ去っておりません。そのままお持ち下さい」

と、弥に言われた為に持っていたのである。まさかそれが苴乎の立場を悪くするなど、弥は思いもなかったであろう。

監獄の外で待たされている弥は、彼には珍しく落ち着かない様子であった。燈景とも特に会話することなく、監獄の門から中を覗いて

はやめ、辺りを意味もなく動き回っていた。

「弥よ。そう心配せんでよい。直ぐに誤解は解けよう」

「旦那様が李兄弟に誘拐されたと、すんなりと信じてくれるでしょうか。あの賀矯のことです。根も葉も無いことを司寇様に言うに違いありません」

「だから心配するな」

弥の肩に手を置いた燈県は、苓紀子が決して凡庸ではなく、賀矯の毒に侵されることなく公平な目で判断してくれるだろうと、自信満々に語った。

燈県殿は分かっておられぬ……。弥の心配は、燈県の知らぬ事実に起因している。

苴乎様は私の弟などではなく、昇王朝の血をひくお方なのだ。

もしそのことが露見しようなら、苴乎様のお命はない。心でそう呟いた弥は、次の瞬間はつとした。苴乎は孝傑や孝傑と密接に関わる者達にとって、紛れも無く危険な存在であった。何と言っても此処は、昇王朝に牙を剥いた雷楽の本拠地、奠であるからだ。既に雷楽が苴乎の行方を探しているかもしれない。弥は胃にきりきりと痛みを感じた。

大京がある帯振と奠がある茗の間にある地域を於渌よせんと言う。

於渌は帯振や茗より遙かに広大であるが、夏元最大の河川である大江たいを始め、夏江かこうや来河らいがなどの大きな河が連なっており、実質的に人が暮らせる面積は大きくない。農業が生活の中心であるこの地方は人口も少なく、生活水準も高くない。ただ、夏元の首都である大京と、大商業都市である奠に挟まれている恩恵はしっかりと受けていた。於渌には河が流れている以外に、人も流れているのである。人の行き来は絶え間無く、於渌には多くの宿場が作られるようになった。

大江のほとりに、酔いの亭と言う大きな宿屋があった。規模は辺りで最大であり、大江を渡る為の舟も出していた。宿屋の主人である

流は、今日も繁雑な仕事に追われていた。

「舟が足りないだ。えつとなんだ、あそこのを使えねえのか。あつ、いや、違う。だからさっきから言ってた。とにかくちょっと待たせとけ」

今日はやけに忙しいなあ。額から落ちる汗が目に入り、流は思わず身をよじった。

忙しいったらありやしねえ。今日は何だってんだ。使用人の少年が流に近付いてきて、耳元で囁いた。

「俺に客だと。それはそうだろうよ。みんなが俺の客に違いねえ」
流は余りの忙しさに、もう笑うしかない、高らかな笑い声をあげた。

「違うだって。特別な人だから会った方がいいって。分かった、分かった。会えばいいんだな」

もうどうにでもなれとなっている流は、今ある仕事を放りだし、案内をする少年の後についていった。

「あなた様は」

来訪した人物を見て、流の表情が一変した。商売人がよくする、あのこやかな顔になったのである。

「これはこれは、よくお越し下さいました」

両手を揉みながらその男に近付くと、

「その格好はどうなさいましたか」

と、流は男のぼろぼろの衣類に目を留めて聞いた。が、男はその質問には答えず、向こう岸まで渡りたい旨を伝えた。

「生憎今は舟を切らしておりまして、一刻ばかりお待ち頂かなければなりません」

男は渋い笑みを浮かべて頷くと、

「水と食糧、それによく走る馬を頼みたい」

と言って、近くに腰を降ろした。

「分かりました。それで、どこに行かれるんですか」

男は疲れているのか、ゆっくりと目を閉じ、

「奠」

とだけ言うと、後は動かなくなった。

急がねば……。男は焦る気持ちを抑え、その態勢のままで一時の眠りについた。かなり疲れていたのか、男は回りの騒音にも全く反応せず、死んだように眠った。男が奠に到着するのは、これより三日後のことであつた。

太陽は頂上に昇り切り、一日の中で一番暑い時間帯であつた。今日は最近では最も暑い一日になるのであるが、此処酔いの亭には、河川から気持ちのよい春風が流れ込み、滞在客には過ごしやすい一日になるのであつた。

昔乎は苓紀子の問いに、沈黙でしか答えられなかった。弥の出身地や両親の名前、いつから奠で住み、奠のどこで住んでいるのかなど、昔乎が答えられない事は多い。配下に任せず、自ら質問役を買って出た苓紀子は、段々と疑いの色を濃くしながらも、根気よく質問を続けた。

「賊と一緒にいるのを見たという者がいるが、まことか」

「はい。ですが理由があります」

昔乎はただ黙っていた訳ではない。話すべき内容を整理していたのだ。無言の少年が初めて口を開いたことに、苓紀子は眉間の皺を解いた。

「理由があると。では申してみよ」

昔乎はゆつくりと、慎重に言葉を選びながら話し始めた。苓紀子にはそれが子供らしいたどしさに感じたに違いない。

「孝傑様と奠に向かつていましたが、途中で、二、三十人の賊に囲まれました。孝傑様は、連れていかれて、私は、賊の一人と、此処までやって来ました。此処で言われた金を集めて、その一緒に来た賊の所に、持って行かなくては、なりません。どうか、兄の所に返して下さい」

昔乎の小さな頬に涙が流れた。演技ではない。張り詰めていた昔乎

の心が、弥と離されたことで切れてしまったのである。孤独感が無防備な苺乎を襲う。誰かに助けて欲しかった。

「真実みには、欠ける話だが……」

腕組みをしながら、浮かぬ顔で苓紀子は言った。

目の前で懸命に訴える少年が、嘘を言っているようには思えないが、果たしてあの用心深い孝傑殿が、小さな子供と二人だけで危険な荒野を移動するだろうか、と苓紀子は訝った。どう判断したらいいか決めかねている苓紀子とは対照的に、苓紀子の後ろで血管を浮き立たせている賀矯は、茹蛸のように顔を赤くして、

「司寇様、信じてはなりませんぞ。なんて餓鬼だ。虚言で我々をおとしめるつもりですぞ」

この少年をおとしめようとしているのは、お前ではないか。苓紀子は心の中で舌打ちした。苓紀子は仮にも警察長官とも言える司寇の役職に身を置く者である。正義感は一倍強い。悪い噂の絶えない賀矯に、良い印象を持てるはずがなかった。賀矯が口を挟めば挟むほど、苓紀子は苺乎に同情を寄せるのであった。

しかしそれとは別に、苺乎の持つ、さわやかで清々しい気塊が、苓紀子の心に少なからず影響を与えていたのも事実であった。

苓紀子は思う。両親の姓名すら答えない少年は、確かに疑わしい。が、話をする時の少年には、濁りのない清らかな水の流れのような純粹さがあると。

さて、どうしたものか……。苓紀子は深く息を吸い脳に酸素を送ると、腕組みをして考えた。

夜になり、苺乎は独房に容れられた。苓紀子は苺乎の無数の痣や傷痕を配慮し、丁重に扱うよう配下に命令した。

「二、三日独房に容れて様子を見る。例え孝傑殿が少年の言うように賊に捕まっているとしても、もはや命は無かるう。莫周辺の警備を強化し、李兄弟を捕まえる方が先決である」

苓紀子は結局のところ、李兄弟と孝傑が繋がっているとは考えず、よって苺乎にはそれほどが興味がなかった。

要は本当に近くに李兄弟がいるかどうかであった。

「近くに李兄弟の一人が隠れておる。何としても見つけ出して捕らえよ」

配下にそう命令した苓紀子の鼻息は荒い。名のある賊を捕らえれば、名声が上がりその分出世も早い。苓紀子の全神経は、李空に向けられたのである。

苜乎は現世に忘れられたように、一人独房に放置された。看守はただ無言で食事を運ぶだけであり、苜乎は無という空間と戦うことではなく、自分の存在を確認することが出来なかった。

外では弥と燈県が額に汗を滲ませながら、懸命に苜乎の救出と金策とを模索していた。

「苜乎なら大丈夫だ。直ぐに釈放されるわい。それより時間がない。一回断られた所にも、もう一度頭をさげようではないか」

燈県の言葉に、弥は奥歯に物が挟まる思いであった。苜乎のことはもはやどうしようもなく、出来ること、則ち孝傑を救う為に金をかき集めるしか選択のしようがなかった。

でも。弥は思う。苜乎を助けてやりたいと。苜乎の秘密が露見すれば、自分達にも危難が及ぶ。そういった保身だけでなく、もっと単純な、その人の為に何かしたいという思いが、弥の中に芽生え始めていたのではないだろうか。

苜乎様……。弥は苜乎について思いを馳せた。苜乎と過ごした時間は短いが、弥はしっかりと、人を引き付ける苜乎の魅力を感じ取っていたのである。

苜乎が墓に来て、三回目の夜を迎えようとしていた。苜乎の開放は失念され、李空の搜索の指揮に忙しい苓紀子は、弥の面会申し入れにも、もはや応じる気配すらなかった。それどころではないというのが苓紀子の意見であり、苜乎は現世との繋がりを絶たれたようなものであった。

独房は地下にあり、明かりも入らなければ風も吹かない。

昼と夜の日に二度、看守が炬を燈して食事を運んで来る。

苴乎はそれによって時が流れていることを知り、失いそうな五感を回復させた。

独房の中は無であり、無は実ではなく虚である。

虚の中で苴乎は実であり続けなくてはならなかった。活発な時期である少年時代にこのような体験をしたことは、苴乎を大きく成長させる要因になったかもしれない。しかし今の苴乎にとって、肉体的に辛いより精神的に辛いこの時間は、何にも増して耐え難かった。後に人々から尊敬を集めるまでに成長した苴乎はこう言った。

「少年時代に独房で過ごした時間は、私にとって最も辛い時間であったかもしれない。あの経験があったからこそ、私は今こうして此処にいられるのである」

独房生活は苴乎の胸に、忘れられない時間として刻まれたのだ。

看守が四回目の食事を持って来た。炬で照らされた苴乎の顔は、涙でぐしゃぐしゃになっていた。看守は、もう三日目だから無理もない、と同情を寄せたが、声まではかけなかった。が、食事は毎食残さず食べていた少年が、全く食べるそぶりを見せないことを心配し、「おい、大丈夫か」

と、思わず声をかけた。苴乎は看守に背中を見せた。ほつといてほしい、と少年の背中が語つてるように思えた看守は、気にはなったが、食事を置いたままにして独房を後にした。

独房での四度目の食事は、李空との約束の朝が過ぎたことを意味していた。つまり、苴乎は孝傑を助けられなかったのである。李空と数日間行動を共にした苴乎は、李空の考え方が分かっているつもりであった。李空は苴乎が戻らなければ、身の危険を感じて逃げてもうだろうと。

それは孝傑の死を確定させることであった。

ごめんなさい。やっぱり私には無理でした。私には……私には……。苴乎は大声で泣いた。有りつたけの思いを、一気に吐き出すかのように。苴乎は涙が枯れるまで泣いた。喉が限界に達し声がでなくと

も、苺乎は心の中で叫び続けた。

散々に泣いた後、苺乎は廃人のように動きを止めた。

実際に廃人と言っても差し障りがなかったであろう。看守はその後二度食事を運んだが、苺乎が死んでいるのではないかと思ったほどである。苺乎は食事にも一切手を出さず、ただそこにいるだけの存在になった。心配した看守が声をかけても、苺乎は何の反応も見せない。無の空間の中で、苺乎は無と同化したのである。

突然、苺乎は何者かに抱き寄せられた。はっとして現実に取り戻された苺乎は、とても懐かしく、そして温かい声を聞いた。枯れた筈の涙が目頭を熱くした。良く知った男の胸の中で、苺乎は貧るように男の身体にしがみついて泣いた。男はもう一度、苺乎の耳元で囁いた。

「苺乎様、もう安心して下さい。苺乎様にはこの孝傑がついておりますゆえ」

孝傑は両腕でしっかりと苺乎を包み込んだ。

莫（四）（後書き）

これまで拙い文章を読んで頂きましてありがとうございます。次話は孝傑が莫に來れた謎の解明と、いよいよ各諸侯らによる戦が始まります。宜しければ続きも読んで下さい。

軍師躍動（一）

茗^{めい}の諸侯である雷^{らい}樂^{らく}が、大京^{だいきょう}を占拠してから二週間が過ぎようとしていた。雷樂は大京陥落後、直ぐに各諸侯らに使者を出し、各地で虎王の死と昇王朝の滅亡を高らかに宣言したのであった。

「各諸侯においては、これより二ヶ月以内に大京に入貢頂きたい。仮に期日内に入貢頂かなければ、自領の壘を高く築くことだ、との仰せであります」

と、そう言つて使者は最後を締め括つた。

これは雷樂が夏元^{かげん}の新たな王になることを認め、貢ぎ物を持参して忠誠を示せということであつた。また、もし拒めば、武力を行使すると脅したのである。こうした流れは雷樂の氣質が大きく影響していると言えよう。雷樂は天下の為に悪政を続けた虎王を倒したが、それは建前であり、自らが天下を治めたいという若年の頃に打ち立てた夢を、現実のものにただけなのである。

茗の領主の長男として産声をあげた雷樂は、成人するまで何不自由ない生活を送つた。

雷樂は幼い時分から既に貫禄を持ち合わせていた。同年代の子供だけにはおさまらず、回りの大人達をも従えて威張り散らす毎日であつたのだ。

「おい、そのお前。ああお前だよ。俺が誰だか分かるか」

雷樂の名を一度目に言えない者は、二度目に聞かれた時にも言えなければ容赦なく鞭で打たれた。そうやって少年時代の雷樂は、邑内の至る所で自分の名を広めたのである。

「領主様は自分の子にあめえ。あれではこつちがたまらねえ」

邑民は陰口を叩く毎日を過ごした。しかし、親の権力を借りてやりたい放題の雷樂であつたが、気前の良さを持ち合わせていた為に、案外人気もあつた。

「何、こいつが大事な肉を腐らせた……。それで喧嘩してるのか。」

よし、わしが買い取ろう。だから仲良くしな」

そうやって喧嘩を仲裁したり、

「何で泣いてる。　　そうか、父親が帰ってこないのか……。分かった。俺がお前の父親を探してやるからもう泣くな」

と、困っている人を見掛けては援助を申し出たりした。雷楽の評価ははつきりと分かれた。が、回りの迷惑を考えない自分勝手な行動は、歳を加える毎に減っていき、代わりに面倒見の良い行動が増えていった為、成人する頃には雷楽の評判はかなり良いものになっていた。

この時代、形の上では昇王朝が天下を治めてはいたが、各州毎にそれぞれが独立国家を築いていたと言えよう。諸侯の中には自領を拡張しようとする者も当然いた。というより全ての諸侯がそう考えていたとも言えなくはなかった。州同士間の戦は絶えることがなく、茗も例外ではなかった。

雷楽は特に同年輩に人気があり、また親の立場からすれば、今のうちに次期領主に我が息子を覚えてもらいたいという腹積もりがあった。成人式を終えた雷楽の初陣には、多くの若者が争うように参加志願を申し出たのである。

諸侯の息子である太子の初陣では、太子は軍の安全な場所に配置され、激しい交戦を回避するのが普通である。後の君主になる太子に何かあれば大変であるから当然であろう。雷楽も中軍の後方という安全な位置に配置された。しかし、雷楽は初めての実戦経験で、自分の将来を占うような賭にでたのだ。

「父君は戦が分かっておらぬ。負けぬ戦ばかりしておるから勝てぬのだ」

両親を尊び、君主を神と仰ぐこの時代に、雷楽の言葉は信じ難いものである。廃嫡にも成り兼ねないこの発言は、雷楽を取り巻く配下の面々の心臓をわし掴みにしたも同然であった。

「俺についてこい。勝利とは何たるかを教えてくれようぞ」

雷楽はそう言って、回りの様子も確認せず、馬腹を蹴って敵軍に突

撃した。雷樂の信じられない発言で浮足立っていた者達は、これにかえって肚を据えた。ここで雷樂を死なせる訳にはいけない。雷樂の後に人の波が続いた。

およそ攻撃はしてこないとかを括っていた敵軍は、相手の予想だにしない突進に慌てた。しかも先頭の雷樂の武力が尋常ではない。敵軍は針で刺された風船のように弾け飛んだのである。

大勝であった。これほどの大勝利は参加した茗兵の記憶にはないであろう。雷樂は軍法違反を犯しはしたが、その勝利により罪を帳消しにされた。そして、一緒に戦った兵達からは、喝采と称賛を浴びせられたのであった。

「父上、そろそろ引退して体を休めたらどうでしょうか」

雷樂は自信に溢れんばかりの笑みを見せ、君主である父に迫った。既に父の近臣は抱き込んである。味方に引き込めなかった有力者は、父の古き友人でもある宰相の李喬りきやうだけであつた。

大勝利の波に乗った雷樂は、翌年二十一歳の若さにして、父を押し退ける形で茗の君主になったのであった。

雷樂の父は回りを見渡し、自分の時代が終焉したことを悟ったに違いない。回りの目はあからさまに自分を邪魔だと語っていたのである。もはや味方は李喬だけである。息子の雷樂に国政を任せた方が、あるいは茗にとって良いかもしれない。父は息子を憎まなかった。潔く引退した雷樂の父は同じく引退した李喬と共に自宅に引き込み、次世代に国政を委ねた。

雷樂は君主の席に腰を降ろし、新君主の誕生を祝う配下の顔を一人ずつ見ていった。

茗には人材がおらんのか。心の中でそう吐き捨てた雷樂は、自分の野望を満たすには時間が必要なことを覚悟した。

国政を補佐させようと考えていた宰相の李喬も引退してしまった今、雷樂は当初の予定を変更せざるを得ない。領内を李喬に任せ、早々に隣州に攻め入るつもりであつたのだが、李喬に代わる人材はいそうもなく、雷樂はじつくりと腰を据え、国力を上げることに専念し

たのであつた。

雷樂が君主になって二十七年が経つた。茗は雷樂により、隣州を飲み込める程にその国力を高めた。領土は僅かに東へ二十里拡げただけである。が、軍資金や兵糧などの経済力、兵や軍馬などの軍事力は他州を圧倒しており、いつでも領土拡大が可能であるように思われた。

この長い年月で、ある程度の人材は得た。有能な武官や文官は揃っている。しかし雷樂は他州を攻めとつていくには、まだ人手不足だと感じていた。今でも、戦争すれば必ず勝つ自信はある。だが、天下を征するという雷樂の尊大な夢に、一步を踏み出すにはまだ十分ではないと感じていたのである。軍師足る者がいないと。そんな時である。

雷樂の元に李喬が訪ねてきたのは。

雷樂が何度人を遣わせても、また自分で出向いて行つても、李喬は病床と言つて決して姿を見せなかった。

そんな李喬が自ら雷樂に拝謁を申し込んだのである。

雷樂は喜びと不信感に揺られながら李喬を迎えた。雷樂の知っているかつての李喬は、体から大きな気を放ち、尊厳さと静肅さを持ち合わせた威厳があつた。父をも侮りの目でみていた雷樂が、李喬に對しては一目置いていたのであつた。かつての姿を想像していた雷樂は、二十七年振りに会つた李喬を見て、多少の戸惑いを見せた。李喬の歳は定かではないが、まだ七十にはなっていないはずであつた。しかし、雷樂の目の前の男は、皺だらけの顔に折れ曲がつた背中、朽ち果てた老人であつたのだ。

ああはなりたくないものだ。現役であつたからこそその氣塊であつたか。雷樂は心中溜息をついた。この時点で、雷樂は李喬から得られるものは既に何も無いと思つたのであろう。さつさと用件を言えとばかりに、雷樂は形式的な挨拶も手短に済ませ、無言の圧力を李喬に加えた。

「奠の北にある渥菴あくあんという地をご存知でございます」

李喬の口調は動じることなく堂々としていた。

「渥菴の託岱たくたいは斗歌とかであり、君がもし龍昇りゅうしょうのごとく大望をお持ちなら、最高の礼をして、迎えるべきでございます」

雷樂は雷に打たれた思いであつた。

李喬の言葉は、雷樂が長らく待ち続けたものであつたからだ。

外見は枯れ果てた李喬であるが、声力は昔のままである。

よく李喬の顔を見れば、目はかつての力強さを失つてはいない。侮りが自らの首を絞めることを知っている雷樂は、居住まいを正し、李喬に向かって慇懃に礼を示した。弟子が師に教をこつと同じように、頭を下げたのである。人材を欲している君主の波長と、自分の代わりを推挙しにきたかつての宰相の波長とが、見事に合わさつた瞬間であつた。

「野心ばかりで実が伴わぬこの私に、どうかお聞きかせ願いたい。

託岱とはいかなる人物でありますか」

「託岱は天下の偉才であります。また、彼はその心に天下を動かしたいという大望を持っておりますので、君が召し抱えずとも、やがてどこかで地位を得ることになりましょう。もし彼を重宝する気がないならば、必ずや将来君の妨げとなりましょうから、彼が他国に走る前に殺すべきでございます」

腰を僅かに浮かせた体制で話しに聴き入る雷樂は、手に汗をかいていた。興奮していたのであろう。雷樂は李喬にそこまで言わせる男が、この茗にいたのかと驚愕の思いであつた。と、同時に自分の視野の狭さに呆れる思いでもあつた。雷樂はもつとその人物について知りたい、与李喬に詰め寄るのであつた。

渥菴という小さな農村の小領主の第二子として産まれた託岱は、小さな頃よりその類い稀な才で周囲を驚かせていた。同年代がやっと言葉を上手く使いこなせるようになった時には、託岱は歴史書を読み耽る毎日を過ごしていた。少年は脇に抱える書物を片時も放すこ

とはなかったが、決して他の少年らと野を元気に走り回らなかった訳ではなかった。むしろ農村で一番活発な少年であったと言えるであろう。

青年になった託岱は、ある日母親に、

「もつと見識を広めとうございます」

と、言葉に力を込めて切り出した。託岱の母親は絵に描いたような良母であり、才覚も悪くない。託岱のことを誰よりも分かっている人であると言っても過言ではなかった。母親は涙で潤んだ瞳を息子に向け、

「家のことは心配しなくてもよいのです。書からでは獲られぬこともありません。あなたはもつと多くのことを見て体験して、立派な人になりなさい」

と、気持ちの良い豊かな声で応えた。以前から託岱の母は、託岱がこんな小さな農村でおさまる器ではなく、いつか必ず此処から飛び出すと予感していたのであった。

「母上……」

母が気丈に接しようと必死になればなるほど、託岱の胸は熱くなった。

「十年下さい。諸国を旅し、見識を広めて必ず戻って参ります」

託岱の言葉は短い。が、その言葉に込められた気持ちは、語れば一日や二日では言い尽くせないほどであった。

この年、託岱は十八歳になっていた。出発の日には、家族や親類だけでなく、村の大部分の住民が集まった。

託岱の父は前に出て、

「岱よ、そなたは我らの希望にならねばならぬ。農民が安泰に暮らした時代はなかった。岱よ、十年後、そなたの勇気で国を変えてみよう」

と、皆に聞こえる声で言った。当初から託岱の旅については反対していた父であったが、押し切られる形でこの日を迎えた。そんな父の口から、場違いとも言える大言が発せられるとは、託岱以下一同

は唾然とした。しかし一瞬の沈黙の後、託岱を激励する沢山の言葉が大気を揺らした。小さな農村は賑やかに託岱を送り出したのである。

父は託岱に厳しい人であった。

思えば父に褒められたことはなかった。

託岱はこの時初めて父の自分に対する期待の大きさを知った。託岱は泣かなかった。別れを惜しむ気持ちは勿論あったが、それ以上に未来への意気込みが強かったのだ。託岱は鍛え貫かれた自らの足で生まれ育った地から出た。託岱は十年にも及ぶ諸国漫遊の旅に出たのである。その精力的な旅が、託岱を大きく成長させたことは言うまでもない。

大京の乱で殺された約三千の人間の身元を一人一人確認する作業は、大変な労力を必要とした。死んだ人間の身内や知り合いに確認してもらったのだが、そうした者達の怒りと悲しみは計り知れない。殺すことも辛いが、この確認する任務はもっと辛いものとなったのである。

「なあ、俺はもう嫌だよ」

「ああ、俺もこんなことしたくねえ」

「もう死体と過ごすなんて真つ平だ。それにあいつらの顔見たか。俺達を怨んでいやがる」

「無理もない。家族を殺されたんだ。怨んでも怨みきれねえよ。罪なんてもんもねえんだしよ」

こんな会話が、身元確認時には聞こえてきた。

王族の身元確認を担当する責任ある將軍達ですら、兵卒と思いは同じで、やりたくない、であった。

「この女性とこの子供、きっと圭姫様けいひと苜乎様きよかに違いないと思うが、確認した方がよいだろうか」

「別にいいさ。皆殺しにしたんだから。死んでることに間違いはないさ」

或は將軍達の作業の方が、酷くずさんなものであったのかもしれない。このように大京の乱後の処理がずさんだった為に、圭姫と昔乎は歴史上では死んだことになるのであった。

大京に降り注ぐ陽の光は柔らかで暖かい。風は西から清々しさを運び込んでいる。しかし、大京の宮殿は血の惨劇を忘れなてはいなかった。宮殿内の死体は全て片付けられたが、至る所に血痕が残っており、正気の人間ならばとても長時間は留まらなかった。

雷樂は大京の外に陣をはり、そこから忙しく命令を発していた。託岱の仕事量も半端なものなく、寝る間も惜しむ程であった。

「超羽と名乗る者が面会を求めています、いかがいたしましう」

託岱の顔が明るくなった。託岱は超羽のことがずっと気になっていた。今になれば、取るに足らないことを頼んでしまったという思いであったのだ。この大事な時だからこそ、初めての配下である超羽には近くにいて欲しかったのである。

「只今戻りました」

超羽が姿を見せた時、託岱は走り寄って超羽に抱き着いた。

「よくぞ無事に戻られた。しばらく待つて戻らなければ、どうしようかと心配したぞ」

超羽は予想もしない主君の対応に戸惑いながら、

「任務はまだ果たせておりませんが、進展がございましたので報告に参りました」

と、いかにも配下らしいよそよそしさで告げた。

超羽の話は託岱を安心させ、彼に対する評価を上げさせた。

「これはまた、かなりの戦利品だな」

超羽が差し出した金と宝品の多さに、託岱は驚いた。

「追っておりました車はこれでございます。中にはこのように見事な財が積まれていたようです」

「大京から脱出したのは王族ではなく、我がの財を守ろうとした商

人であつたか」

「そのようでございます。車の持ち主の商人が一人賊に捕われておりましたが、車と財との交換で開放致しましたがよろしかったでしょうか」

託岱は笑みをこぼしながら頷いた。一抹の不安が解消され、さらにこれ程の財が手に入るとは誰が予想しようか。金はあるに越したことはない。託岱は超羽の手を握り、感情を込めた労いの言葉をかけた。

丹念に地面を調べ歩いた結果、超羽は大京西門から出たらしき車輪跡を発見した。車は南に向かったらしいことを突き止めた超羽の足は速い。一時は見失った車輪跡も、途中からは完全に確認でき、さらに歩速をあげることができた。雨があがれば、かえって跡ははっきりと残る。超羽は調査開始三日目にして、車を見つけたのであった。

「ほう、賊の寝ぐらか」

車は森林の奥深くにある賊の住家らしき所にあつた。月のない深夜である。見張りはおらず、寝静まっていた。

託岱はこの場の静けさと同化するように、物音一つたてずに建物の中に侵入し、腰の剣を抜いた。

躊躇することのない剣先が、赤く赤く塗り替えられていった。一撃で急所を貫かれた賊らは、眠ったまま声を発することなくこの世を去っていった。漆黒の闇の中においても、超羽の視力はさほど落ちないのであろう。全く無駄のない動作が続いた。それは一種の完成された楽曲に、なぞらえているようでもあつた。

最深部の部屋に来た超羽の足が止まった。

部屋の奥では一人の初老の男が座してこちらを見ていた。腕と足を紐で結ばれており、賊に捕らえられているのが見て取れた。超羽は車に積まれていた大量の金と、居間に散乱していた沢山の宝品を思い出し、大京から脱出したのがこの男であり、途中で賊に捕まっ

たことを悟った。躊躇なく人を危める超羽であるが、決して殺人が好きという訳ではなかった。

暗闇で向こうはこちらの顔は見えない。生かすか……。超羽がそう考えていた時、捕われの男が口を開いた。

「助けて頂ければ、此処にある私の財は差し上げましょう」

超羽は盗人ではない。

賊の物であれば頂くが、この男の物と分かれればそうはいかない。仕事を完璧にこなす為にやむを得ず庶民を殺すことはあるが、今回は顔を見られた訳ではないので、殺す理由もない。何より、どんな理由であろうと庶民を殺すと後味が悪い。超羽は男の動きを封じている紐を剣で切った。そして超羽は闇に吸い込まれるように、無言で男の前から立ち去った。

孝傑は目を閉じ、暫くじつとしていた。

意識を耳に集中し、研ぎ澄ました聴覚は、どんなに小さな物音をも見逃さなかったであろう。

先程の暗闇の人物は、どうやら建物の外に出たようであった。

孝傑は目を開けゆっくりと立ち上がり、音をたてないように此処からの逃走を開始した。血の臭いが鼻の奥に突き刺さった。暗闇の中、立ち止まることなく、何とか外に出ることが出来た孝傑は、全ての賊が殺されたことなど知るよしもなかった。孝傑の頭の中は甚平のことについてであり、一刻も早く墓に行くことしか考えられないのであった。

軍師躍動（二）

雷樂が各地に使者を出してから、二ヶ月が経とうとしていた。夏元全土で二十八ある州の内十七までは大京に入貢してきた。態度を示さぬ州が五つあり、六つの州が抗戦の意を表した。これは託岱が予想した構図とぴたりとあっている。

「兵二万を与える。早々に亦、部、范、斜を討て」

雷樂は託岱を將軍に任命し、夏元西部の征圧に乗り出そうとした。しかし、側近らから、

「今回のことで託岱殿に功があるのは分かりますが、兵二万を預けるとするのは如何でしょうか」

と、反対意見が多数出た。軍事経験のない新参者にはせいぜい三千が妥当な数であり、足りない分は道中で手に入れるということであった。

「道中には広支や赫といった既に我が軍に服従した州もあります。それらの諸侯に援軍を出させましょう」

宰相の雷操にもそう言われると、雷樂は強行突破を諦め、託岱に発言を促すように視線を投げた。

「援軍は必要ございません。それに兵は三千で十分でございます。

夏元統一に向けた第一歩でございます。我が軍のみで進軍し、いかに茗の兵が強いのか、他州に見せる良い機会でございます」

そう言った託岱は、自信に溢れた声とは反対に、頭を低くした。これで審議は終了し、託岱は早速軍の編成に着手した。

「態度を示さぬ部と范はともかく、亦は一万、斜は五千の兵は出せよう。三千では勝負にならぬように思えるが、軍師殿は何か策があるか」

出兵の要請に來た託岱に、超孟はそう言葉を返した。話の内容は生死を分ける重大なものである筈だが、超孟の表情や声は明るい。まるで軽い冗談を言うように口調は軽やかであった。

異例の昇進を遂げる託岱を妬む者は少なくない。出る杭は早めに打つ必要が、彼らにはあるのであろう。託岱が戦死してくれば、好都合ということである。

「若輩の私が率いれる軍勢は三千が限度でございましょう。従っている諸侯は私にはなく我が君に従っておられるのですから、私の指揮下に入ることをよくは思わない筈です。統率のとれぬ大軍よりは統率のとれた小軍の方が戦えます」

三千という兵数は、託岱が事前に予測した数と同じである。小軍で大軍を打ち倒すことは、茗軍がいかに強いが、託岱がいかに優れた將軍であるかを、天下に示す良い機会でもあったのだ。

「どうやら意中に策ありのようですね。私の一千の兵をお預けしましう。むろん私も出陣しう」

他州が隣州との争いで兵を消耗している間、茗は兵を鍛え上げていた。戦争になれば茗兵は一人で三人を相手にすることができであろう。託岱は屈強な茗兵の中から精鋭三千を選抜し、夏元西部へと出陣した。

夏元最西部の海に面した地域が亦である。亦を治めるのは諸侯唐司である。六十歳になった唐司は雷樂の謀反を知って、

「これで大義名分ができたわい」

と、喜色満面で独り呟いた。

唐司は雷樂の使者を前に自らを亦王と名乗り、謀反人である雷樂を撃つことを宣言して使者を殺した。雷樂への宣戦布告であった。亦是海で採れる塩によって、莫大な利益をあげていた。その為物資が豊富で、この時代には珍しい鉄の武具を揃えていた。隣接する斜とは現在同盟中であり、唐司は直ぐに斜に軍を要請した。

唐司の呼び掛けで集まった総勢二万の亦斜連合軍は、雷樂に降った綿壤の邑を襲いながら、東へと進軍していった。

大京を出発した三千は全て騎馬である。行軍速度が一日に八十里と

言われる騎馬であるが、この軍は緩慢で一日に二十里しか進まなかった。託岱は数里進めば休憩させ、邑を見つければ食糧を補給して宴会に興じた。ただ、託岱が偵騎をかなりの速度で先行させていたのも事実であったが、兵らは知るよしもなかった。

鼻息荒く軍の見回りから戻った超羽は、託岱に軍紀の乱れを訴え、進軍速度を上げるよう迫った。

「途中で志願兵が加わり、我が軍は今で三千五百。志願兵の大半は徒歩であり、戦が初めての者も多い」

託岱の返答に超羽は納得できない。茗軍は精鋭揃いである。素人兵が幾ら加わろうと邪魔なだけである。そんなことも気付かない託岱もまた、初めての戦であることに気がつき、超羽はやる瀬なくなつた。

超羽は父である超孟を訪ね、不平不満を爆発させた。父なら分かつてくれる、そう思っていた超羽であったが、

「軍師殿が休めというならお前もそうしろ」

と、父の反応は冷たかった。

何たることか、これでは全滅してしまう。超羽は再び託岱に馬を並べた。

託岱は超羽の言を制し、軍を停止させた。

「よいか、我が軍の行軍は圜である。このままゆつくりと西へ進み、北から回って来る茗の主力軍一万と、南から回って来る菟^と軍五千とで、唐司軍を三方から挟み撃ちする」

と、託岱は一兵卒にも聞こえよう言い回った。

いつの間に……と啞然としている超羽に近づいた託岱は、耳元で、「途中参加した志願兵で、軍を離れる者がいるか見届けよ。見つけても止めずともよい。が、直ぐに私に知らせよ」

と、小声で超羽にだけ聞こえるように言った。

翌朝になり、志願兵の中で姿を消した者達がでた。超羽は意味も分からないままに、託岱にそのことを報告した。

「超羽よ、途中から参加している志願兵には此处で置いていくこと

を伝え、騎馬三千にはこれより全速力で西進することを伝えよ」

託岱は超羽にそう言つと、自らも軍中を回り、兵士らに出発を促した。

精銳である茗軍の中にも、これまでの雰囲氣に吞まれ、緩慢な動きをする者も幾人かいた。託岱がその中の一人を軍律違反として処刑すると、場の雰囲氣は一変した。元々が精銳揃いである。もはや無駄口を叩く者はいない。託岱の指揮の元、茗軍は風の如く西走したのである。

亦の宰相乾丹かんたんの元に、茗軍に潜り込ました間者らが皆得意満面な顔で戻ってきた。

茗を出発した三千の騎兵は宴会三昧で戦意がなく、指揮する託岱は兵に休憩ばかり与える無能な将であると、間者らは見たままを報告した。さらに、実は主力一万が新たに茗を出発しており、菟軍五千と共に我が軍を挟撃する作戦である、と興奮を隠さずに告げた。乾丹はそのことを唐司に報告する為に、直ぐに唐司の天幕に向かった。

「茗を出発した三千は凶であるか」

唐司は急報に胸を踊らせた。

「さようでございます。茗の主力は今頃芋支ちよしを疾走しております。菟軍五千も南の道を進んでおります。東征する我が軍を、恐らく西関盆地かんで挟撃する腹でございますう」

「うむ。直ぐに準備を致せ。この戦で茗軍を完膚なきまでに打ち倒してくれよう」

唐司は二万の軍を三つに分けた。一万二千を北に、五千を南に出発させた。

「君がおります軍が三千では少々心許ないような気が致しますが」「心配はいらん。西関盆地に堅固な陣を張り、陣中に我が軍の旗を有りったけ並べれば良い。敵は我が軍が三つに別れたのを知らぬから、たかだか三千で二万の軍には攻め込むまいよ」

茗軍の作戦は、北西南の三方から挟撃しようとするものである。

中央を進む三千は囷であり、南北からの援軍があつて初めて突撃を開始するのである。

茗軍三千が援軍が現れぬのを知る頃には、南北で大勝した亦軍が戸惑う三千の茗軍を背後から襲う手筈であつた。逃げ惑う茗兵の姿を想像し、連日唐司は上機嫌で宴会を催した。唐司はまさか茗軍三千が、予想を遥かに上回る速度で東進していようなど考えもしなかったのだ。この時点で既に勝敗は決していたと言えるだろう。

唐司率いる三千の中央軍は、見晴らしの良い平野に到着した。明日には西関盆地に到着できる。夕日が赤々と大地を照らす中、勝利を祝う最後の宴会が催された。唐司軍は此処で野営することに決めたのであつた。決戦は明日以降であり、その地は西関盆地であることに何の疑いも抱かなかつた亦軍の陣は粗末なものであつた。もし今夜敵に襲撃されれば、一たまりもないであろう。

音を起てず、一系乱れぬ行軍をする軍影が、深夜の大地を走破していた。前方にほのかな明かりが見えた。野営している亦軍の炬火の明かりは、平坦な地でかなり遠くからでも発見することができた。託岱は軍を自在に操つた。

闇と同化させながら、亦軍に発見されないままに四方を取り囲んだ。超羽は分けが分からぬまま此処までついてきた。今回の託岱の行動に対して、多少なりとも不信感を抱いていたのも確かである。しかし、炬を点す亦の陣を迅速に取り囲む託岱の指揮振りは的確であり無駄がなく、超羽は託岱への疑念を打ち消すことになる。

託岱は自ら弓をとり、矢に火をつけた。それを合図に茗軍は一斉に矢に火をつける。大地がぱつと明るくなった。整然と立ち並ぶ明かりは、見る者を魅惑しただろう。

「射よ」

託岱は号令と共に火矢を放った。亦軍を取り囲む茗軍から三千本の火矢が飛んだ。託岱は素早く突撃の太鼓を叩いた。弓兵から騎兵に

成り代わった茗軍三千は、気合いを入れる雄叫びをあげながら、ごうごうと燃え盛る亦軍に向かって矛を揃えて突撃した。

炎と煙に包まれた亦兵はたちまち大混乱に陥った。全く予期せぬ敵軍の襲撃に、亦兵は戦うことより逃げることを優先したのだ。慌てて逃げようとした者は茗軍の矛の餌食となり、何が起きているのか理解できずにいる者は茗兵の馬に跳ね飛ばされた。

襲撃開始から程なく、戦場に亦の君主唐司の首が転がった。討ち取ったのは双戈范そうかはんである。

「唐司は死んだぞ」

双戈范は大地を揺るがす程の大声で叫んだ。茗兵は一斉に歓声をあげた。

「唐司は死んだぞ。降伏しろ」

主君を討たれ、混乱に拍車をかけた亦兵に、茗兵は降伏を促した。既に逃げ場を失い、敵兵が取り囲む中で四散する亦兵は、藁にも縋る思いであつた。そこへ唐司の死である。亦兵は我先と降伏を願ひ出たのだ。奮戦を決意していた少数の亦兵も、味方の降伏を目の当たりにし、戦意を失い武器を置いた。

亦軍の死者は五百人にのぼり、残りは全て捕虜となった。一方茗軍は数十人の負傷者を出したが、死んだ者はいなかった。

「大勝利でございます」

超羽は歓喜に身を震わせていた。

「超羽よ。唐司を討ただけでは、まだ勝敗は決していないぞ。何故今回の夜襲で敵陣を囲み込んだか分かるか」

託岱は大勝利の後でも表情を崩さない。超羽は託岱を尊敬の眼差しで見ている。

「よいか、この夜襲でただ一人の敵兵をも逃がさなかったことは、今後の戦に生きてくるのだ」

「今後の戦……でございますか」

「そうだ。今回の夜襲が、南北に布陣している亦軍に伝わることはない。明日には、現れることのない菟軍を待ち伏せしている南の亦

軍の背後を襲う」

「菟軍は援軍に來ないのですか」

「菟軍も茗の援軍も幻よ。亦軍にとっては我が軍も幻であろう」

綿壤の君主である法克は、託岱が捕虜とした亦兵二千五百を快く引き受けた。

散々領内を荒らし回った亦兵を捕虜として引き渡すというのである。法克は小躍りするほど喜んだに違いない。身軽になった茗軍は、南方に布陣する亦軍五千の背後をつくべく出発した。昨夜の勝利で兵の士気は高い。軍内に作戦の全容が伝わると、さらなる勝利を確信した兵達は、意気揚々と馬の背に跨がった。

菟軍を林の中で待ち伏せして襲う計画の亦軍は、いつの間にか三方から火が迫っていることに気がついた。

「全軍林から出よ」

軍を預かる斜の君主崔巴は、火の手が見えない林の出口へと兵を誘導した。亦軍は動揺はしたものの、さしたる混乱もなく移動を開始した。亦軍にとって、そこは黄泉への入口となることも知らずに。この時点では敵が近くにしようなどとは思いつたのである。林の出口で待ち伏せしていた茗軍は、恰好の標的となった亦軍に向けて矢の雨を降らした。林から出て来た亦兵は、ばたばたと矢に倒れていく。後方からは火と煙が迫り、前方からは矢の雨である。進退窮まった亦兵の末路は死しかない。

亦軍の死者は七割にも及び、残りは負傷して動けないところを茗軍に捕獲された。茗軍は死者どころか、かすり傷を負った者さえいない。完勝であった。ちなみに敵將の崔巴は、全身に矢を浴びて戦死していた。

勢いに乗る茗軍は、休むことなく馬首を北に向けて出発した。圧勝に続く圧勝で、兵に疲労感はない。

北上する茗軍は、視界に亦軍を捉らえた。

託岱は亦軍を前にして、目立つように唐司の首を亦軍の旗に括りつけた。

茗兵は託岱の命令通りに、唐司が既に死んだことを叫びながら突撃した。

奇襲を受けた亦軍は、相手の数さえ把握できない現況で、自分達の大將が既に討ち取られた事実を突き付けられたのである。

戦意喪失の亦軍一万二千は、もはや戦う集団では有り得なかった。

亦兵は味方を押し退けるように、ちりじりになって逃げ出したのである。茗軍はばらばらに逃げる亦兵には目もくれず、大將である乾丹目掛けて直進した。乾丹は懸命に味方の逃亡を防ぎ、戦うよう呼び掛けたが、唐司の死で反乱が失敗に終わったと決め付けた兵らの心を動かすことはできなかった。

亦の宰相である乾丹は、猛進する超孟配下一千に踏み潰される形で戦死した。それを知った時、亦兵は完全に四散したのであった。

この茗軍三千が亦斜連合軍二万を敗った戦いを、西関の戦いと言う。西関の戦いで、託岱の名は世に知られることになる。天才軍師と呼ばれることになる男の、記念すべき第一戦であった。

託岱は亦の首都亦埜^{えきや}を占領し、そこを西方征圧の拠点とした。

託岱は手始めに、

「反乱の首謀者は死んだとはいえ、加担した者も当然罪に問わねばならぬ。しかし、今回我が軍に参加した者は、その罪が消えることになる。また、働きによっては恩賞も得らるだろう」

と、そう宣言して亦と斜で兵を募集した。先の戦いで命を拾った惨敗兵が、続々と亦埜に集まってきた。西関の戦いで大勝利した託岱の名と、恩賞に釣られた者達も加わった託岱の軍は、実に一万八千にも膨れ上がったのであった。

託岱は茗に対して態度をはっきりさせなかった部と范に対し、その圧倒的な兵数で迫ったのである。勝機の見えない部と范は、直ぐに和睦の使者を出した。

「今更和睦もあるまい。降伏に参ったのであろう」

部と范の使者らはいずれも老齡な説客であつたが、託岱は彼らの話には耳を貸さず、そう言い放つたのである。託岱の態度になすすべがなくなつた使者は、無条件降伏を呑むしかなかった。

託岱は茗を出発してから僅か三ヶ月足らずで夏元西方を征圧したのであつた。託岱はしばらくは亦埜に留まり、夏元西方の安定に尽力することになるのであつた。託岱は、亦、斜、部、范の地を雷樂から授かり、西方一帯を治める亦王となつたのである。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5844a/>

菅乎（きょか）

2010年10月9日01時29分発行